
宇宙孤児の秘密

冴木雅行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙孤児の秘密

【Nコード】

N1873Z

【作者名】

冴木雅行

【あらすじ】

遠い遠い未来。人類は地球から別の恒星系へと旅立ち、数世代かけて居住可能惑星にたどり着いた。しかし、そこにたどり着いたのは、宇宙で子を産み育てた「宇宙世代」ではなく、冷凍冬眠技術によって眠りににつき、自覚めた者たちだけだった。やがて近恒星間航行が可能となり、惑星連盟という緩やかな共同体が成立しても、宇宙空間で子孫が生き残れなかったという惑星移住世代の心の傷は深く、宇宙で子をなすことはタブーだった。商船団が恒星系間を行き交い、内乱や戦争が宇宙空間で行われるようになったころようや

く時代は変わり始めた。宇宙での出産が相次いだ。地上の人は宇宙で一生を終えることはできない。たとえ、宇宙空間で子をなしても、心身の限界により、親は地上に帰らなければならない。宇宙空間で生まれた子が地上で生きられる技術もなかった。このような不運な子らは「宇宙孤児」と称された。これは、「宇宙孤児」の誕生からさらに数百年未来のお話。第2章スタートしました。

1. どうしてここにいるのだろつと僕は最も静かな戦場で思った。

宇宙空間での戦闘は、静寂に包まれていると何かで読んだ記憶がある。確かに、味方の艦隊が巨大な出力の光学兵器を連射していても、敵の攻撃で破壊され、撃沈されていても、艦橋は無音だった。

そう、僕は戦場にいる。宇宙軍の軽戦闘艦の臨時オペレーターとして。

本来、オペレーターの役割は、情報処理だ。艦内外の情報を把握して報告する。いくらAIによる情報処理が主流になっているとは言え、人の目での確認、判断を不要としないのが軍隊である。とはいっても、僕のやることは限られていた。自分で「育てた」パーソナルAI（PAI）がほとんどの処理をしているからだ。僕は、必要な情報を解釈し、伝えるだけだ。

僕はパートナーであるPAIを「ミニ」と呼んでいる。名前は愛着を誘う。そもそもPAIのカスタマイズ自体は、程度の差こそあれ、誰でもやっている。ホログラミング・フィギュアを好みの異性（まれに同性の人もいるが）にしたりするのは、一般人でもやっていることだ。着せ替え人形のようにしたり、変な語尾を付けさせれば、見事「ヘンタイ」という侮蔑の称号を与えられる（なぜ、ヘンタイと呼称されるのかはよく知らないが、響きは侮蔑に向いている）。でも、僕のように、プログラミングから手を入れ、「育てる」のは、気が触れたマニアとしか言いようがない。言い訳はしない。反省もしない。

僕は、惑星連盟軍宇宙大学校工機科に所属しているが、この学生にもヘンタイは多くてもマニアは少ないらしい。というのも僕は

出会ったことがない。一度、僕が、P A I のプログラミング構造について、P A I に詳しくそんな同期に話をふったとき、全く話が噛み合わなかった。

僕が軍の大学に入ったのは、宇宙孤児という不運な身の上だっただけでなく、A I 研究のためだった。5年間従軍すれば、違約金も発生しない。軍の研究職にだって就けるかもしれない。そんな淡い期待を持って入学した。でも、入学してからそうそう経たないうちに、僕のそんな淡い期待は、甘い夢だったと思い知らされた。軍隊というのは、金に糸目を付けられないものだ。しかし、それは利用可能性の高いものという限定つきなのだ。

— A I は、軍において実用化されて久しく、デバックの必要すらないほどシステムの安定している。A I の構造を抜本的に見直すことは、コストパフォーマンスが悪すぎる—

これを僕は、ゼミでも、配属志望聴取時でも、個人研究授業でも、さらには立ち話でも、少将待遇の学科長から軍のカウンセラーまで色んな人から何度も言われた。「固定観念を打ち破らないところに科学の発展はない」が口癖の老教授までもが同じことを言ったのだ。

こうして僕は、自分の研究計画が軍では受け入れられないことを悟り、しばらくの間、A I 研究を個人的な趣味に止めておくことにした。さっさと従軍義務を終えて、貯まった給料でどこかの大学の工科学研究科に行こうと決心し、学業を淡々とこなし、寮ではミミを「育てる」日々を過ごしていた。

…あの人に目をつけられるまでは。

1 どうしてここにいるのだろつと僕は最も静かな戦場で思った。(後書き)

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

2・幼女と巨乳美女（ただし、声のみ）

『負け戦ですね』

ミミが僕に語りかける。脳内で。10歳くらいの女の子の声。

僕はPAIのマニアかもしれないが、別に精神は病んでいない。

ミミの発話は、耳に取り付けた疎通器具「ミニニケータ」によるものだ。PAIと脳との間で相互に電気信号を伝えることができる。歴史的にはバーチャルリアリティの発達に合わせて、このような脳電磁器具も開発されてきた。軍でも「訓練」や「尋問」にバーチャルリアリティが活用されているらしい。あと僕はロリコンでも、ペドフィリアでもない。ミミの成長を人間の成長に合わせているだけである。何て言うか、育ててる実感が湧くじゃないか。

『その通りだね、ミミ。でも、僕らの任務は終わってないし、僕はまだ死にたくないなあ』

僕は、心の中で話す。

『んーと、じゃあ、戦術目標の第一順位をマスターの生存、第二順位を任務の遂行に切り替えますか？』

『ちよつと待って、ミミ。第一順位は、僕と同僚と船団の人たちの生存にして』

『はい。マスター！』

元気の良い声。素直な娘に育ってくれているようだ。

『じゃあ、頼むよ』

この会話は時間にすれば一瞬、1秒にも満たない。実際には電気信号のやり取りなのだから当然といえば当然である。これが、僕が組んだPAI―ミミの一形態だ。

「負け戦ね」

ミミとの対話が終わるや、それを見計らったように僕を戦場に連れてきた張本人の声がする。音声のみのプライベート通信。何で任務中に艦長がプライベート通信をするのかと至極真つ当な怒りを覚える。

マリーベル・フォーゲルト、惑星連盟軍宇宙大学校戦術研究科4年の先輩。通称マリア。金髪碧眼の超絶美人、成績良し、スタイル良し、家柄良しとの評判である。ただ、性格がひん曲がりすぎて、一回転しているからまっすぐに見えるというこの世の不思議を、僕はこの人に垣間見る。本人には言わないが。

「ええ。護衛艦隊の損傷率は2割をまもなく越えるでしょう。一方で敵艦隊にはほとんど損傷を与えられていません。戦意も高いと思われます」

意趣返しのもりで、艦長席の仮想ディスプレイに映っているであろう当たり前の情報を報告する。敵は、艦隊という名に恥じない陣容である。今は、攻撃が少し薄くなっているが、紡錘陣に組み替えるつもりだろう。攻撃しながら陣形を組み替えるのは相当の練度が必要なはずだ。下手にやると、味方を攻撃しかねない。

「……『宇宙海賊』なんてネーミングは間違いいね。今の宇宙軍の精鋭だって、かの有名なクラフト中将の艦隊でもこれほどの動きはできないわ」

僕の答えが気に入らなかったのか、少しムツとした様子でマリアは言う。

「確かに、マリアの言うとおりだろう。『宇宙海賊』は惑星連盟による呼称に過ぎない。商船団や輸送船など民間の船がこの宙域で行方不明になる事件が頻発したので、マスコミがそう呼び始め、惑星連盟も追従的にそのように呼称するようになっただけ。僕らは、というか、惑星連盟そのものが、敵を見誤っていたのだ。

僕は、マリアにそそのかされて彼女の任官前実地訓練のサポート要員としてこの戦場にいる。そもそも、実地訓練というのは、戦闘地域や危険宙域に赴きはするが、そこで中難易度の任務を行うものである。マリアのチームが引き受けたのは、この宇宙海賊の跋扈する航路を通行する商船団を護衛するという任務である。正直、商船団もわざわざこんな宙域を通らなくてもと思う。ただ、護衛艦隊が商船団を護衛するので、マリアのチームがやるのは、苦情聞き、医療提供などのほかは護衛艦隊との連絡調整役で、事務作業効率と精神力が試される任務のはずだった。

僕は抜き差しならぬ理由で断り切れず、「まあ、簡単な任務だし私がいるからチヨロいものよ」とのマリアの言葉を少しは信じてついてきたのだ。そして、ふたを開けてみれば、僕たちが停泊した補給基地をあんな練度の高い1個艦隊に急襲されたのである。そしてその報告をした僕に見せたマリアの態度は、一生忘れないと思う。マリアは「やっぱり来たわね」と満面の笑みで言ったのである。

「どうすればいいと思う？」

表情は見えないが、ニヤニヤ笑っている姿が容易に想像できた。

「艦長、私にどうすればいいかを語る資格はありません。軽戦闘艦の技術士官扱いです。その相談は、まずは副長に、その上で教官にすべきでしょう」

僕は、あくまで任務中の態度を崩さない。崩してたまるか。

「もう、意地悪しないでよ。プライベート通信なんだから、マリアって呼びなさいよ」

甘えた声を出すマリア。意地が悪いのはあんだだと言いたいのをかるうじて我慢した。僕の堪忍袋は大きい。自分を褒めてあげたい。

「艦長、そもそも任務中にプライベート通信は、今回の契約書がここにあるんだけど、わすれちゃった？」

僕は、マリアに付きまとわれるようになってから、数々の恥辱を受けてきた。今回、マリアのサポート要員としてついてきたのは、ついてくれば、単位認定があるなどという自分の利益を考えたのではなく、その恥辱の瞬間をカメラに収めたものを、全星系ネットワークの番組に投稿するとの脅迫に屈したことによる。そして、交わした契約書には、マリアの部下として振舞うという条項があった。任務なので、当然だが、マリアは部下を下僕と勘違いしているのではないかというくらい、ことあるごとに僕を頻繁に呼びつけていた。何というひどい話だろう。

「……分かりました」

僕は、ため息を一つついて無駄な抵抗をあきらめることにした。

2・幼女と巨乳美女（ただし、声のみ）（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

3・こいつの所為だと思ったのは、抜き差しならぬ事態になってからだった。

戦いは一方的な展開になっていた。

敵は、そもそも護衛艦隊の2倍以上、陣容も我が軍で言うところの重量級戦艦5隻、巡洋戦艦20隻、軽量級戦艦に至っては100隻を超える。主力は、軽量巡洋艦であるが、惑星連盟宇宙軍が500隻を1個艦隊として数えているやり方言えば、総数は半個艦隊ほどもいる。一方、我が護衛艦隊の陣容は、その半分に満たない。しかし、重量級戦艦1隻、巡洋戦艦5隻、軽量級戦艦50隻、軽量巡洋艦が1000隻弱というのは、護衛としては、十分すぎる。これまでの宇宙海賊の戦力規模を考えれば、襲撃自体があり得なかった。

護衛艦隊は、カイル・フォーツバニア少将が率いている。惑星出身組の将官は珍しくないが、一般兵からの叩き上げという点では極めて珍しい。敵の急襲と圧倒的な攻勢という混乱極まる自体の中で、戦線を維持しているだけでもフォーツバニア少将の能力の高さが分かる。しかし、それも敵が次の攻勢をかければ味方の戦線は一気に崩壊するだろうと他人事のように僕は思った。

僕が戦況を他人事のように考えざるを得なかったのは、我が艦がすでに護衛艦隊の後方から商船団を率いて離脱しているからである。敵部隊の急襲という事態を受け、臨時教官であるフォーツバニア少将から、実地訓練の任務の変更が申し渡されたのだ。護衛艦隊は、軽戦闘艦が1隻いても戦況に全く影響はないし、ましてや任官前のヒヨツ子准尉では話にならないのだろ。表向き、性格のねじれを隠しているマリアは、少将の指示に迅速に対応し、商船団を率いて戦場を離脱した。その手並みは、とてもヒヨツ子准尉のそれではな

った。マリア本人がヒヨツ子ではない自負がありながら邪険に扱われたことや戦術研究科生としていわゆる弾丸（実際には光学兵器であるが）飛び交う戦場を離脱させられたことに対して不満に思わな
いわけがなかった。それ故の「どうするべきか」との質問なのだろ
う。

「どうすべきかと聞かれましても、我々の前方にいると思われる伏
兵を何とかして、商船団を安全宙域まで送り届けるしかないと思
います。」

僕は、そっけなく意見を述べる。

「あら、伏兵なんてどうして分かるの？」

マリアは、さも驚いたかのように聞く。僕は、マリアが後ろの艦長
席でニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていると確信した。

「敵はあれだけの艦隊を用意して奇襲したんです。用意周到にも
ほどがあります。そうすれば商船団を戦線から離脱させない策があ
ってしかるべきです。でも、僕らは戦線を離脱できた。敵がとんで
もないすっかり屋さんか、わざと離脱させたか考えるのが普通で
す。おそらく商船団を無傷で捕らえることが目的と思われます。」

「そうね。それで、伏兵を何とかするってどうするの？戦術シミュ
レーションで私が唯一勝てなかったあなたの策が聞きたいわ。」

マリアは、甘く挑発するように言った。台詞が違えば、誘惑されて
いると勘違いしそうな声である。

「策といっても大した……」

と良いかけた僕の脳内に女の子の声が響く。

『マスター、デレデレしてる』

なぜか拗ねたような声でミミが言う。

『ミミの勘違いだよ。報告かい？』

電気パルスを読み取れるミミが勘違いする訳はないのだが、思わず
そう言った。

『うん。この先の待ち伏せできるところと待ち伏せの人数とどうしたらいいかを調べて5つくらい作戦を立てたよ』

『ありがとう。早いね。さすがだね』

『うん。マスターのためだもん。あと、さっきの悪い人たちの動きも調べたよ。』

『良い子だね、ミミは。』

『うふふ、私マスターだいス「ビー」!」』

ミミと一瞬のやり取りをしていると、仮想ディスプレイ上に艦長から緊急呼出しがかかる。

思わず艦長席を振り返ると、マリアが獰猛な肉食獣が獲物を見つけたときの笑みを思わせる表情で手招きしていた。僕は、急いでオペレーターの仕事にミミに任せるよう設定し、艦長席に向かった。僕は全身にびっしょり冷や汗をかいていた。

3 ・こいつの所為だと思ったのは、抜き差しならぬ事態になってからだった。

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

4・養母の教えは正しかった。

僕は、心の中でミミに頼むよと言い、艦橋の1段上にある艦長席に向かった。それにしても、マリアがミミとの会話に気づくはずはないのに不思議なことだと思う。そういえば、と僕はマリアが変に鋭かったことを思い出した。

工廠科出身者でも、士官である限り前線に立つことはある。宇宙大学の基本単位を取らせるための建前だけではなく現実にあるのだ。だから、基本訓練及び戦闘実習は工廠生でも単位取得基準が厳しい。無料で大学に通わせてもらっているのだから義務はあつて当然だと思う。

戦闘実習の中に戦術シミュレーションという授業がある。ゲーム好きも多い工廠生にとっては比較的ありがたい授業である。マリアを初めて認識したのは、その授業だった。この科目の単位取認定テストは、教官の代わりに戦術科の先輩が敵役をする。教官としては、戦術研究科生の適性を見る機会でもあり、だいたい後輩はコテンパにやられる。これが工廠科生の通る道だった。僕たちの学年もその例に漏れず、成績優秀者でさえ、完膚なきまでに叩き伏せられており、時間切れの引き分けさえ、まれだった。

テストでは、当然ながら成績優秀者同士を当てるものである。可もなく不可もない戦績の僕は、同じくらいの成績の先輩と戦う予定であり、僕は負けるまでの時間をいかに引き伸ばそうかと考えていた。しかし、なぜか僕の対戦相手はマリアだった。あとで聞いた話だが、マリアの戦績は無敗。ぶっちぎりの成績優秀者だったらしい。

教官は、たいそう気の毒そうに「瞬時に負けても単位はやるから。」と僕に告げた。僕はあまり気にするでもなく、「はあ、ありがとうございます」と表向きのお礼を述べた。でも、質問は決してすべきではなかったのだ。好奇心は猫をも殺すと養母が常々言っていたじゃないか。

「でも、どうしてですか？」

士官を目指すものにとって理由を問うてはならないということを僕は分かっていなかった。教官は啞然とした様子で僕を見ていた。教官がなんと説明しようかと迷うそぶりしていると、僕の対戦相手が声を上げた。

「私のことをまさか知らないなんて言わないでしよう？」

自信に満ちた立ち居振舞い。スタイルの良さはトップモデル並みなんだろうと思った。

「私は工廠科なもので。申し訳ありませんが、存じ上げません。お名前を教えてくださいませんか？」

僕は、本当に知らなかったのだ。それがたぶんマリアの氣にくわなかつのだと思う。

「あんだ……いい度胸ね。」

この先輩の名前を聞くのに手続が要るはずはない。何がこの人を不機嫌にさせたのか。なるほど、人の名前を聞くときは、まず自分から名乗るべきと言いたいらしい。

「これは失礼しました。私は、工廠科2年のシヨーン・ヒルガと申します。」

「そんなことは知ってるわよ！……たく、戦術科3年のマリーベル・フォーゲルトよ。」

どうやら、選択肢を間違えたようだ。女性をよく分らない。でも、その名字には覚えがあった。

「フォーゲルト先輩？…あ、突撃と速攻が得意な人でしたっけ。」

「そ、そうよ。」

ちょっとびっくりしたのだろうか、名前を知られていなかった怒りが続いているのかちょっと顔が赤い。

「それは、失礼しました。先輩の突撃、速攻の見事さにアーカИБをいくつかほぞん、いや見たことがあったんです。でも、お会いしたのは初めてですよね？」

「ほ、誉めても無駄よ。でも、まあ私のアーカИБを見るなんて見所あるわね。」

なんか急に見所のあるやつに昇格したらしい。

「いえ、どうしたらあの速攻を防げるかと考えていたんですけど、工廠科の僕にはさっぱり。」

お世辞のきく人だと思つた僕は、さらに持ち上げようとした。

「私のアーカИБを見たなら私の実力が分かるでしょう？何でも言うことを聞かつて約束するなら、手を抜いてあげても良いわよ。」
言ってる意味が分からない。ただのテストで何で我が身の自由を賭けないといけないのか。評価不能の敗けなら追試を受けなければならない。しかも、瞬時に負けても単位はもらえたとお墨付きをもらったのだ。

「せっかくの申し出ですが、遠慮しておきます。私はこの授業に人生賭けてないですから。別に手を抜いていただいても、結果に変わりないと思いますので。」

「勝負から逃げるわけね、男らしくない。」

何で挑発されているのだろう。まるで素行不良の輩に絡まれた気分がする。この手の人の行動原理は理解できない。

「勝負と仰いましたが、ご自分が相当に有利な条件のもとにいらっしゃるのですから、逃げることになんのためらいも生まれません」

「・・・じ、じゃあ、ハンディを付けてあげるわよ。構わないでしょうか、教官？」

教官は僕の方を気の毒そうに見て頷いた。テストとは言え、たかだか授業なのに何でこんなことになるのか。ただ、この人は、意味不明の行動原理でどうしても僕と賭け勝負がしたいようで、断れば別

の機会にまた絡まれそうな気がする。

「ハンディをもらう代わりに、負けたら僕はどうなるんです？」

「私が勝ったら、生まれてきたことを後悔するくらいに辱しめてやるわ」

僕は、助けを求めて教官を見た。教官は目をそらした。

（責任者が逃げやがった。）

たかがテストに僕の人としての権利がかかる。そんな事態になった。口は災いの元だと養母が言っていたのを思い出した。

結局、僕が貰ったハンディは、積載物資の変更と通常よりも10分多い準備時間、そしてPAIの使用だった。そもそも、このテストは初めから工廠科生にハンディが与えられている。1個艦隊同士の艦隊戦なのだが、戦術科の先輩は、標準的な編成の艦隊を指揮することになる。一方、工廠科生は、編成自由、戦場の決定権もある。しかも、戦術科の先輩は勝利が必要だが、我々は艦隊として戦闘不能に追い込まなければいいのだ。それだけのハンディがあってもなお、工廠科生は負けてしまう。

僕が、マリアの模擬戦のアーカイブを保存（PAIに保存する）とは基本的にできない仕様になっているが、ミミは人間と同じように「見る」ことで覚えることが可能なのだ。）したのは、ミミの思考訓練のためだった。別に戦術シミュレーションでいい得点をとろうと思ったからではない。もし、そうなら僕はもっと良い戦績を修めている。ミミは、戦術シミュレーションが得意、というか好きなのようだった。今では1度誰かの戦術アーカイブ見せると、僕が考えるよりも優秀な対応策が数種類返ってくる。それ故、僕にはそれなりの勝算があった。こうして僕は、人としての尊厳の危機を回避すべく、ミミと共に望まぬ戦いに身を投じることにした。

「準備時間中、だれか女性としゃべっていなかった？」

マリアが仮想ディスプレイ越しに聞いてきた。

「まさか。フォーゲルト先輩もそこにいらつしゃったでしょう?」

「…そうね。それよりも準備はできたのかしら?」

「ええ。戦場はアルワナ小惑星域でお願いします」

「聞いたことない場所ね…まあいいわ。それにしても、君、余裕そうに見えるわね」

「半分あきらめで、半分後悔してるんですよ。お手柔らかにお願いします」

「それはダメね。今日から君は私の奴隷になることが決まっているんだから」

僕はため息を一つつき、教官を見た。教官は頷いて開始を告げた。

「は?何これ?!」

マリアが変な声を出す。まあ、そうだろう。艦隊の編成があり得ないのだ。

「テーマは宇宙海賊です」

僕は、この編成のコンセプトを告げた。

4・養母の教えは正しかった。（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

5・愛情を持って育ててきたのに、非行に走りそうな娘を見て、僕は不謹慎に

マリアに聞こえるはずはないのだが、僕とミミは、こんな会話を交わしていた。

『マスター、大変なことになっちゃったね。あの年増女のせいで』

『年増って、いつの間にそんな言葉をおぼえたの?!』

娘の非行は、愛情不足が原因と言われる。僕は、さらに愛情をかけてミミを育てようと決意した。

『ミミが用意したこの作戦なら絶対に勝てるよ。』

僕の眼前に、作戦の概要が示される。僕がかけている《マルチグラス》に映っているのだ。

『ええと……うわあ。これは悪辣だな』

僕は、そんな感想を述べた。ミミが提案した作戦は、確かに戦術シミュレーションで負けない方法としては最適と思ったが、どう考えても正規軍がやる作戦ではなかった。

『あくらつって?』

『とても意地悪だということだよ』

『意地悪しちゃだめだった?』

ミミは、シュンとした声を出す。

『いや、ミミは一番いい作戦を立てたんだよ。心配しないで。うん、これで行こう。そうすれば、僕は奴隷にならなくて済むし、あの先輩も面目が保たれると思うからね』

僕らの戦いを観戦しようと集まってきた人々をみれば、どうやらマリーベル・フォーゲルト先輩、通称マリアには、熱烈な支持者がいるようだ。僕が徹底的に悪役を演じれば、卑怯な手段をとられたから負けたと思ってもらえるだろう。そうすれば、僕が勝っても、少なくともマリアの評価は下がることはない。僕への敵意や関心を減らすのは別に方法を考えればいいだろう。

こうして僕は、「宇宙海賊」を演じることにした。

ミミが戦場に選んだアルワナ小惑星域を、マリアと同様に僕もこの時まで知らなかった。不思議なことに、ミミには、膨大な数の恒星系の地理データが、最初から頭に入っている様子なのだ。僕が教えた知識でなく、ミミが自分で学習したデータベースでもない（そもそも、恒星系の地理データは一部しか公開されていない。）ので、そう考えるしかなかった。ミミを公にできないのは、僕にヘンタイだとかロリコンだとかの不名誉な評価が与えられる恐れだけではなく、僕にもよくわかっていない秘密がミミにありそうだからなのだ。

アルワナ小惑星域は、恒星アルワナを中心とした星系にある。恒星アルワナは老年期終盤を迎え弱い光を放っている。かつて周囲を公転していた惑星の小ささまざまな残骸が、帯状に広がり今なお主星の周りを公転し続けている。恒星アルワナと小惑星域の間に布陣すれば、外部からの侵入経路が限られる。小惑星域はその帯の外に向かうほど残骸の密度は薄く、中心に行くほど密度は濃い。最も密度の濃い中心部ですら相当広く、ここを回避してこちらまでたどり着くのには、ゲーム内時間で1日かかり、それだけで時間制限に引っ掛かる。それゆえ、敵艦隊が攻めてくるとすれば、残骸の隙間を縫う狭い天然のトンネルをくぐってくるしかない。突撃と速攻を得意とする敵艦隊にとっては、厄介な布陣となるはずだ。

マリアが驚いたのは、僕の艦隊の編成である。通常、1個艦隊の編成においては、軽量級から重量級の巡洋艦が主力となる。そして分艦隊指揮に巡洋戦艦を割り当て、部隊指揮に軽量級戦艦を割り当てる。あとは、火力と機動力のバランスによって、重量級戦艦の割り当てを決めるのである。僕は、巡洋艦の編成を全く変えた。通常、2500隻ほど割り当てる軽量巡洋艦を外して、工作艦と輸送艦に

割り当てたのだ。工作艦は、機雷敷設、惑星降下など特殊作戦用の艦であり、輸送艦は、非戦闘要員や物資を輸送するための光学兵器を搭載していない艦である。火力を考えれば、僕は勝利など絶対に望めないはずと考えるだろう。

開始直前30秒間、相手の艦隊編成が見れる仕様になっている。マリアは不審に思ったはずだが、歴戦の猛者であっても、30秒間考えたところで、艦隊編成のみでこちらの作戦を読むことはできないだろう。マリアは、眉根を寄せて考えている様子だった。やがて、開戦の合図が出され、僕の人としての尊厳がかかった戦いが開始された。明らかにけんかをふっかけられた側の僕が悪役を演じざるをないところが釈然としなかったが、これしか方法がなかった。

開戦の合図を聞くやいなや、マリアは、艦隊を密度の薄い方形陣から、素早く陣形を再編し始めた。それはそれは、見事な艦隊運動だった。ゲーム内時間で1時間ほどで、横につぶれた半球陣に再編成をしたのだ。

『さすが、戦術研究生の中でトップスピードを誇るだけのことはあるね。じゃあ、ミニ』

『小惑星帯のどの部分に砲火が集中するかを計算するんだよね？』

『そのとおりだ。僕の指示がなくてもミニはひとりできそうだね』

『嫌！マスターがおしゃべりしてくれないと嫌だもん。……計算完了したよ。』

かわいい。報告が丁寧じゃなくなっているのが特に。娘にメロメロな父親はこんな感じだろうか。

『じゃあ、次はアレを動かそう』

『はい、マスター』

マリア艦隊が動く。速攻である。砲火を集中させるのに最も効果的な場所に最大戦速で移動する。

「撃て！」

マリアは、艦隊指揮官よろしく、号令をかける。

光学兵器は、実際の戦場では目に見えないらしいが、戦術シミュレーションは便宜上光の筋が描かれる。半球陣から一斉に放たれた光の筋が束になり、小惑星帯の1点に集中する。小惑星帯に穴が開く。

「第二射、撃て！」

早い。おそらく普通の人は、照準を定め直すのに時間を要するだろう。それをしないということは、マリアが何手先もの指示を考えているということだ。

再度、半球陣から光の束がさつきよりも奥をめがけて放たれる。時間制限がある中では、この戦術しかないのだ。しかし、マリアは無駄がなく、早い。たくさん的小惑星を吹き飛ばし、トンネルを穿つ。

「ビー！ビー！マリア・フォーゲルト、ペナルティです。5分間行動不能になります。」

機械的な音声が響いた

「え？！……何？非戦闘艦の撃沈？どういうこと！」

マリアは叫ぶ。僕は、混乱しても気品のある人はいるんだなあとぼんやりそんな事を思った。

「僕の艦隊の輸送艦が、先輩の艦隊の射程距離内で白旗を上げて、救難信号を発していたはずです。」

「そんなバカなことってある？教官、ルール違反ではなくて？」

教官に対して堂々たる態度のマリア。

「いや、ルールにはある。艦隊戦シミュレーションでは使わないが。」

「そもそもルールにないことはできないようになってるはずですよ、先輩。」

「く！」

5分のペナルティ、ゲーム時間内では2時間余り浪費することになる。残りは20時間弱となる。

「どうやら、同じことを恐れて速攻と突撃はあきらめてくれそうだね。」

「あの狭いトンネルを通ってもらわないと、いけないですもんね、マスター」

「そうだね。じゃあ、白旗と救難信号は相手の射程内に入ったら出すように設定して。」

「もうやっておいたよ。次のも用意する？マスター」

「そうだね。時間を見計らってやってくれる？」

「はい、マスター！」

5分のペナルティを終え、艦隊を再編する。予想通り、縦列陣を組み、小惑星帯のトンネルを抜ける作戦に切り替えたようだ。しかし、早い。予想よりもはるかに速い。チラッとマリアに目をやると、異常な集中力でキーを叩いていた。

1時間も経たないうちに、縦列陣を完成させ、小惑星帯に突入した。

本当に無駄のない陣形である。基本に忠実なのだが、少しでも前後の距離を縮めようとやや円柱に近い形になるように組まれており、芸術的とすら思える。

トンネル内には、マリア艦隊が加速するタイミングを計算し、その直前に救難信号を発する輸送船団を何重にも配している。ちなみに僕は何もやっていない。ミミがやった計算である。

「くっ、悪辣ね」

マリアが思わず漏らす。

「宇宙海賊にとってはほめ言葉です、先輩」

「くっ、あの年増悔しがってるね、マスター」

明るく、悪口を言うミミ。そんな娘に育てた覚えはありません。

いや、今僕は、悪役で、戦闘員を乗せた艦を盾にするなど朝飯前なのだ。ミミも悪役に徹しているだけだと思う。そう思いたい。

マリア艦隊は、手際良く輸送船を救助しトンネル内を進む。それでも、これが10回を超えるころには、マリアのイライラも頂点に達していた。

「そろそろ、敵も強硬策に出るはずだ」

「うん、もうタイミングは計算して、次のもやっておきました！」

「本当にすごいね。ミミは」

自分が育てているPAIをほめたたえるなんてゆがんだナルシズムだと自分でも思う。でも、本当に出来がいいのだ、この娘は。

1つの場所で救助を求める輸送艦の数を、進むごとにどんどん増えるように配置している。マリアが、今出会っているのは、その場所の上から下までを埋め尽くすほどの数の輸送艦だろう。ここで、変化が起きた。マリアが軽量巡洋艦を前に出し、輸送艦に低速で体

当たりをさせ、道を空ける作戦に切り替えたのだ。これだけ同じ策で邪魔をされると、誰でもさすがに焦る。陣形を崩してでも早く進みたいとの欲望には、さすがのマリアもかなわなかったようだ。しかし、焦りは、冷静さを失わせ、観察眼を曇らせる。

この先、輸送艦は、これまでの半分ほどの距離ごとに現れる。しかし、違いはそれだけではない。輸送艦に物資輸送用のポッドが艦下部に結わえつけられている。また、輸送艦自体に、最低限のシステム維持用しか燃料が残されていないのも特徴である。救難信号の内容もそのことを伝える内容に変化しているのだが、マリアは気づくだろうか。

結論からいえば、気付かなかった様子である。軽量巡洋艦に低速で体当たりをさせ、道を空けて先を急ぐ。間隔をおかずに出てくる輸送艦、先を急ぐために、空ける道の幅は狭くなっていく。だんだん隊列が伸びていく。

『今だ！』

『はい！マスター』

僕の指示、いや、ミミの指示で、物資輸送用ポッドに取り付けられている自動エンジンが一斉に火を噴いた。一気に全力でブーストする。当然輸送艦は、それにつられて進もうとする。しかし、ポッドが結わえつけられており、姿勢制御も十分でない各輸送艦は別々の方向に進もうとする。輸送艦同士がぶつかる。全力でブーストしているエンジンに輸送艦がぶつかる。コントロールを失った輸送艦がマリア艦隊にぶつかる。狭いトンネルの中で多重事故が起きた。あちこちで爆発が起きる。マリア艦隊は、この策によって、四分五裂に分断されてしまった。

「ビー！ビー！マリア・フォーゲルト、ペナルティです。5分間行動不能になります。」

「何でよ！」

憤怒の声を上げるマリア。

「いや、救難信号を無視した結果ですよ、先輩。輸送艦はちゃんと情報提供していたはずです。姿勢制御用の十分な燃料もないって。」
「くっ……」

ペナルティが終わり、トンネル内の混乱も収まるころ、マリア艦隊の実働艦数は半減していた。

気がつけば、ゲーム終了まであと5時間になっていた。

5・愛情を持って育ててきたのに、非行に走りそうな娘を見て、僕は不謹慎に

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

6・勝者と敗者は紙一重

ゲーム内の5時間は、現実の10分強である。

あと10分間、僕の艦隊に攻撃をさせなければ僕の勝ちだ。しかし、敵は、極めて優秀な艦隊指揮をするマリアである。5時間あれば逆転も可能かもしれない。

『マスター』

ミミの声が脳内に響く。報告モードではない。

『どうした？』

『あの年増は、すぐに小惑星帯を抜けてくると思うの。』

『どうしてそう思うんだい？』

『計算してみたけど、今いる位置から戦略級兵器を使えば一発で抜けられるよ。』

戦略級兵器、特殊砲とも言うが、主に重量級、それも旗艦レベルの艦にしか備え付けられていないものである。威力は強大だが、エネルギーの充填効率が悪く、艦隊戦で使用することはほとんどない。充填している間に、相手が射程距離外まで逃げる事ができるからだ。いわゆる攻城用兵器と言える。

『ああ、なるほど。マリアの旗艦は、半分よりも前にいたんだ。後方で足止めされてもおかしくないのに……何というか、戦いの勘みみたいなものなのかなあ。そうだ、ミミ。敵が小惑星帯のどの部分から抜けてくるか計算できる？』

『もうしてあるよ、マスター』

ディスプレイには、3つの選択肢が示されている。まだ動けるマリア艦隊が現在いると推定される場所から、仰角15度、俯角20度、俯角30度にまっすぐ来た地点が。で示されている。最短はまっす

ぐなのだがまっすぐだとまたペナルティを食らう恐れがあるので、マリアは上か下に角度をつけて撃つはずだ。そして、この3つの角度以外に向けて撃った時には輸送艦が配置されているので、マリアの負けが確定する。

さて、ここからは確率の問題ではなく、心理学の問題である。

当然角度の浅いものが最短になるので、普通に考えれば上に来る。ただ、これまでのマリアが通ってきたトンネルは、左右に振られはするものの緩やかな登りになっている。リーダーでトンネルの構造が確認できないので、これまで通ってきた道を頼りに予測するしかない。とすれば、マリアの立場に立てば、少々遠回りになっても、俯角30度の出口に特殊砲を撃つのが妥当と思われた。

『僕は、一番下から来ると思うけど、ミミはどう思う?』

『ミミは、一番上から来ると思う。』

『どうして、そう思うの?』

『うーん、わかんないけど、あの年増はそうする気がする』

『……ミミが、気がするって言うのは、初めてだね。』

『うん。人が選択する確率からいえば、一番下だと思うんだけど、これまであの年増のアーカイブを見ていてそんな気がするの。なんかうまく説明できなくてごめんなさい、マスター』

P A I が勘に頼るのは正直びっくりしたが、自分の常識に従うか、戦術アーカイブを詳細に記憶し、分析しているミミに従うか。結局、僕はミミに運命を委ねてみることにした。自分は戦術のプロではないのだ。それに、失敗しても次善策はある。

『じゃあ、本隊を4つの分艦隊に分けて、一番上の出口にちょうど火力が集中するように配置。あと、工作艦を縦陣にして、本隊と一番下の出口の間、小惑星帯から30光秒の位置に移動』

『はい!マスター!』

この会話の後すぐに、一番下の出口から高出力のエネルギー波が噴き出た。しかし、最大戦速で殺到してくるはずの艦隊がやってこない。僕は待つ。でも来ない。有利なはずの僕が、追い込まれているような気分になる。艦隊を動かしたくなかった。

『マスター。下の出口は、あの作戦で防げるよ。大丈夫だよ』

ミミの声。これがなければ、僕は艦隊を動かしていたと思う。

少し冷静さを取り戻した僕は、時間を無駄にはできないはずのマリアが焦らしているのだ。何か策があるのだろうと思い、待つことにした。そして、ようやく艦隊らしき集団が下の出口に姿を現わしたその時、一番上の出口からエネルギー波が噴き出たのだ。僕が工作艦と本隊を分けていなければ、おそらく後背を突かれ危機に瀕していただろう。ミミと意見が食い違っていなかったら、その瞬間に負けが決定していたのだ。

下の出口から出てきた艦隊は機動力重視の部隊編成だった。こちら側の空間に出るや、上の出口にいる我が本隊に向かって、楔形陣を組みながら突撃してくる。反応が早い。

『ミミ、工作艦に号令を。下の艦隊をよく狙って。』

『はい、マスター』

ミミの指示で、工作艦が一斉に最大速度で小惑星帯に向かって前進を開始する。工作艦はそれぞれ大きな惑星の残骸を曳航していた。工作艦が加速する。工作艦は敵地近辺での任務を帯びることがある。それゆえ、加速と小回りの利きは艦隊一である。

『今だ！切り離せ』

最大速度に至った瞬間に、曳航していた惑星の残骸を切り離す。惑星の残骸は慣性の法則に従って、亜光速で飛んでいく。下の出口から出てきたマリア艦隊の横っ腹に向かって。1500もの工作艦が

一斉に大きな質量の物体を放ったのだ。密集隊形を取りつつあった分艦隊は、側面からの攻撃をよけきれなかった。装甲の薄い巡洋艦はひとたまりもなく、吹っ飛ばされる。吹っ飛ばされた巡洋艦がほかの巡洋艦を巻き込んで、小惑星帯に衝突する。爆発が起き、爆風で制御を失った艦に別の巡洋艦が突っ込む。この攻撃は、連鎖的な事故を生み、分艦隊はそれに飲み込まれる形で行動不能に追い込まれた。

ちょうどそのとき、火力重視の艦隊が上の出口に殺到した。まさに間一髪である。

「撃て！」

僕が、艦隊指揮官のような号令をかけるとは思ってもみなかった。勢いで言ってしまった。

ミミが計算した通り、上の出口がちょうどクロス・ファイヤー・ポイントに当たり、集中した火力が、戦艦の厚い装甲を撃ち抜く。しかし、マリア艦隊は退かない。味方の屍を乗り越えて、果敢にも死地を切り開こうとする。こちらも気を抜けない。

現実の時間で、ゲーム終了まであと1分となった。

そのとき、下の出口からマリア艦隊の旗艦が出てきたのだ。戦略級兵器のエネルギー充填を終えた状態で。主砲がこちらを向いた。

「撃て！」

マリアが号令をかけた直後、時間切れ終了の合図が出された。

僕は間一髪で勝者になった。しかし、ゲームでなければ死んでいたのはこっちだろう。

そして、この瞬間から、僕はマリアにつきまといられる破目になった

のだ。試合に勝って、勝負に負けるとは、まさにこつこつことを言うのだろうか。

僕は、マリアとの因縁を思い出し、深いため息を一つついた。

6・勝者と敗者は紙一重（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

7・論理的帰結では、戦場で生き残ることはできない。

「艦長、シヨーン・ヒルガ上級技術軍曹、出頭いたしました」

僕は、駆け出し士官丸出しの敬礼をする。マリアも敬礼で応えるが、どうも僕のそれとは似て非なる慣れた所作だと思う。

「ご苦労さま。ブリーフィングを始めるわ。そこに掛けて」

椅子が競り上がる。テーブルをはさんで僕の向かい側には、副長と砲術長が座っている。どちらも戦術研究科生の先輩で、マリアが率いるチームのメンバーである。年上に囲まれ、まじまじと見られると居心地がよくない。しかも、副長であるカール・スワミノフ先輩は、僕がここにいるのがどうしても納得できないらしく、忌々しそうな表情で僕を睨んでいた。イケメンに睨まれてもうれしくないなあと思ってその左に座る砲術長を見る。砲術長は、ウェーブのかかった黒髪が特徴的で、たおやかな笑みを浮かべている女性だ。名前は確か、ベルタ・アダルベルト先輩だったはずだ。この微笑みに魅了される男性は多いのだろう。しかし、僕は、彼女が見た目通りではないことを知っている。何せマリアと行動をとみにしているのだ。推して知るべしということだ。カールのことを「雰囲気だけのキモいナルシスト」だの、「出身惑星の重力が重すぎて、背丈も××も極小」だの、同じ男性として聞くに堪えない悪口を微笑みながら言っていた。そして、そこにカールが現れても悪口を続けるような人だ。僕だって、知らないところでなんて言われているか分からない。

「艦長、我々は3人チームで、彼はあくまでサポート要員です。決定のみ伝えればそれで足りるものではありませんか？」

カールがマリアに言う。マリアは、それに答えず、笑みを浮かべて

僕を見る。

「艦長、スワミノフ副長のおっしゃる通りです。先輩方の訓練ですし、私は控えていた方が宜しいかと思いますが」

僕は、仕方なしにカールの提案を後押しする。そもそも訓練の当事者扱いされるのは遠慮したいし、マリアが提案することにろくなことはない。君子危うきに近づくかと養母も言っていた。

「まあまあ、この艦に人間は4人しかいないですし、彼を邪魔者扱いするのはいけませんわ。」

ベルタが逆のことを言う。それは、要らないフォローです、先輩。

「俺は、邪魔者扱いなどしていい。実地訓練のことを考えて提案しただけだ」

「まあ、そうでしたの？艦長をストーキングしたり、舐めるように艦長の足やら腰やら胸やらを見ることもあなたの実地訓練ですね」詩を読むのに適した美しい声なのに、内容はひどい悪口だ。

「な！」

カールは赤く固まる。先輩、安い挑発に乗らないで下さいよって、反論しねえのかよこの人。「ぐぬぬ…」じゃねえよ。

「…まあ、私が必要と思ったので呼んだまでだ。さて、シヨーン、現状の報告をしてくれる？」

「分かりました。さて、目的地ですが」

コンソールを叩くと、各自の前に仮想ディスプレイが現れる。

「この先、商船団を保護できる安全宙域と言えば、トラディカ星系のみです。燃料の関係で超光速航行は1回しかできないからです。少なくとも追手は来ていませんが、時間がかかれば追手が来ると考えて間違いないと思います」

「おい、我が軍は、カイル少将は、簡単には負けないぞ」

「ええ、副長のおっしゃるとおりです。カイル少将は歴戦の名将ですし、簡単に負けないと思います。ただ、あれだけの兵力差です。

我々を遠くまで逃がしたうえで、離脱を図るのではないのでしょうか」

「ふんっ…宇宙孤児の機械屋に何が分かる」

できる限り刺激しないようにしてるつもりなのだが、何を言ってもダメらしい。背丈も心も小さい人だと思う。

「背丈も心も小さい人は放っておくとして、私もカイル少将が逃げるとは思わないけど」

ベルタがカイルの悪口を言いながら、質問する。僕はマリアを見る。マリアが僕に先を促した。

「ええ、確かに。おっしゃることは分かります。しかし、そもそも私たちが今、率いている商船団をカイル少将のような名将が1000隻余りの艦隊を連れて護衛すること自体がおかしいとは思いませんか？」

「宇宙海賊対策にきまつてるじゃないか。貴様はバカか」

「そうなんです。副長の言うとおり、『宇宙海賊対策』です」

「なるほどね。分かったわ。それならカイル少将たちは、頃合いを見て離脱するわね」

うなずくベルタ。マリアもうなずいている。カイルは、彼女らを見て焦り、自分も分かったようにうなずく。

つまりは、護衛艦隊というよりは、敵状視察がカイル少将の主な任務なのだろう。ある程度戦って、戦力や艦隊編成などの情報を持ち帰るのが主たる目的とすれば、頃合いを見て離脱するはずである。

「話を戻します。できる限り最短でトラディカ星系にたどり着くためには、我々が今入りかけているメディニカ星系を抜けてから、超光速航行を行うことになります。」

「すぐに超光速航行に入ってはダメなのかしら。」
ベルタが聞く。

「それは、技術的な側面から推奨しません。恒星系内は、重力場が安定していないので超光速航行のリスクが格段に上がります。今回は民間船を率いていますので、リスクは避けるべきかと思います。」

「で、メディニカ星系を抜けるルートは限られていて、そこに伏兵がいる。というわけね、シヨーン」

「はい。艦長のおっしゃる通りです」

「伏兵？！か、艦長、どうしてそんなことが分かるんです？」

「脳みそまで小さいなんて、神様はなんて不公平なんでしょう」

ベルタ先輩は、たぶんDSなのだ。

「うるさい！…その宇宙孤児、貴様も分かってないだろう」

「私は、シヨーンからさつきプライベート通信で教わったのよ」

「な！…貴様、任務中に艦長とプライベート通信なんかしやがって、帰還したら報告してやる」

「私、見てたけど、マリアからかけてたわよ。報告するとマリアが訓告をくらうと思うけど」

「ぐぬぬ…」

カール先輩すっかりしてください。本当に「ぐぬぬ…」じゃねえよ。成績はいいはずなんだけどな、この人。

マリアが指摘したとおり、メデイニカ星系を抜けるルートは限られている。それは、補給基地を襲われたため、エネルギーの補給が十分にできなかったことが原因である。我々は最短ルートで進まなければ星系を抜けられないのだ。そして、その最短ルートには、伏兵をひそめるには絶好の小惑星帯を抜けなければならない。八方ふさがり。負けが決定しているようなものだ。敵ながらあつ晴れたなあと僕は思う。

「で、問題は対策ね。副長、今シヨーンから状況とルートについて説明を受けたけど、対策はある？」

マリアは、カールに話を振る。

「…小惑星帯を突っ切るルートは狭いですがトンネルというわけではなさそうですし、曲がりくねっているわけでもないようです。なので、伏兵がいると分かっているにしても、最大速度で一気に突っ切るしかないと思います。幸い、この艦も商船団もアシは早いので」

カールの対策はスタンダードであり、悪くない。欠点は、論理的に考えて誰もが行きつく結論であることだ。敵はここまで戦略的に追い詰めてきているのだ。僕らが生き残るためには、誰もが行きつく結論にひとひねり加えて、敵の裏をかくことが必要なのだと僕は思う。

「シヨーン、あなたの対策は？」

「基本的に、副長の作戦しかないと思います」

カールは、少し安堵の表情を浮かべる。

「基本的にということとは、例外があるのかしら？」

ベルタが聞く。

「もちろん、基本以外の作戦はあると思います。たとえば、できる限りち密な計算をして星系内で超光速航行をするとか、漂流覚悟で遠回りするとか。でも、その場合、一か八かの賭けになると思いますので、推奨しません。私が考えるのは、副長の示された基本策に一工夫をするということです。」

カールが何か言いたい様子だったが、マリアが目で制する。僕は、作戦の基本概要を説明した。

「さすが、悪辣な宇宙海賊を演じてマリアを追い詰めただけはありませんわね」

「やめてください、ベルタ先輩。あまり思い出したくない過去なんですから」

僕がマリアに目をつけられ、こうして戦場まで出てくる破目になったきっかけなのだ。あのテストを休んでいれば、僕は平穩無事な生活を送っていたのだ。

「シヨーンの言った作戦で行くことにするわ。それと、副長に商船団の船長たちへの作戦説明及び商船団の旗艦操船補助を命じます。」

「わ、私ですか?!」

「そうよ。あなたは、操船が得意だったでしょ。この作戦は、商船団が無事あの小惑星帯を抜けないといけない。操船次第で、作戦の成否が決まる。あなたの力にかかっていると言っても過言ではないわ」

「は、はい！謹んで拝命します」

カールは意気揚々と連絡艇に向かっていった。

安い男だとベルタが声を出さずにつぶやいていた。

マリアは単にカールに面倒事を押しつけたに違いないと僕は思った。商船団の操舵手これくらいの操舵はお手のものだろうし、歴戦の船乗りの中に飛び込んで、彼にできることはほとんどないと思えたからだ。

「これくらいの作戦は、マリア先輩なら考えついていたはずですが」
「ええ。でも、ショーンに負ける前なら思いついてなかったわね。」

たぶん、カールの言った作戦でやって、かろうじてこの艦だけ生き延びる。そんな感じだったと思うわ。」

「いやいや、それはないでしょう」

急にマリアが自嘲的に言うので、僕は思わず否定した。それに、あのときも今回も僕というよりは、ミミが考えた作戦なのだ。

「あらあら。邪魔者がいなくなった途端に、お熱いことですねえ」

ベルタが言う。ベルタが、この会話のどこにそんな要素を見つけたのか分からないが、明確に否定しておこう。こんな性格がひん曲がって1回転したような女と恋人に見られるのは御免被る。

「ベルタ先輩の邪推ですからね、それ」

マリアを見ると、なぜか不機嫌そうに目をそらされた。女性をよくわからないと改めて思った。

7・論理的帰結では、戦場で生き残ることはできない。（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

8・クライ・フォー・ザ・ムーン

『ボウズ、姐さん艦長はいるかい』

通信が入る。商船団のリーダーであるトマス・ニツカからである。宇宙孤児に多い、黒髪、黒目で、ガタイの良い、男くさい歴戦の船乗りといった風貌である。僕のことを「ボウズ」と呼ぶが、嫌な感じは受けない。たぶん同じ宇宙孤児としての愛称なのだと思う。

「ニツカ船長、作戦のことで質問かな？」

マリアは、艦長然とした態度で答える。

『ああ、あんたが寄こした小つこいのじゃ話にならん。これまでのようにボウズから連絡を受けた方がまだよかったぞ』

「それはすまない。これから私たちとあなた方の命がかかった作戦をやる。私たちは軍人とはいえ、まだヒヨっ子だ。自分たちだけ体よく逃げかねないと疑われてはいけなと考え、信頼の証として、副長をそちらに寄こしたのだ」

『そりやまた、立派な言い訳を用意したな、姉ちゃん。正直言つて、あの小つこいのが邪魔だったんだろ』

「…慧眼に感服する。いや、彼は能力も悪くないし、ことさら邪魔をするわけでもない。ただ、現時点では船乗りとして欠点が多すぎだと思う。差別意識が強いのもその一つだ」

『なるほど。そりやあ、あれかい。その辺をこっちで叩き直してやればいいのかい？』

「特別な指導までは結構だ。船乗りとして大事なものを見て学ばせてもらえればいい」

『それくらいなら、お安いご用だ。こっちも色々迷惑をかけてるが、あんたは嫌な顔一つせず対応してくれてるからな。』

「それは助かる。感謝申し上げます。」

『照れくさいから、感謝なんていらねえよ。で、ありゃあ、あんたの作戦かい？』

『いや、あんたが『ボウズ』と呼んでいるシヨーン・ヒルガ上級技術軍曹が立てたものだ』

『ほう。じゃあ、ボウズに聞くとするか』

僕は、改めて作戦の概要を説明する。

『なるほど。じゃあ、伏兵は、俺たち商船団を無傷で捕えたいってわけかい』

『ええ。その目的は不明ですが、これまで我が軍が商船団や輸送船の行方不明現場の検証を行った限りでは、現場の兵器使用の痕跡や艦の残骸がないことから、攻撃を受けていないと思われます。』

『と言うことは、素直に投降せざるを得ない状況に追い込まれてこつたな』

『おっしゃる通り、圧倒的な戦力で囲まれるなど逃げる事ができない状況に追い込まれた可能性が高いかと思います』

『なるほどな。で、敵への対策はあれでいいのか？』

『ええ、民間船であるあなたがたに戦う義務はありませんが、今回は特別にお願いせざるをえず、申し訳ありません』

『何をいつてんだ。何もせず訳のわかんねえ敵に捕まるよりゃあ、抵抗するのが漢つてもんだろ？』

『うちの艦長は女ですがね』

『字がちげえよ。あの艦長も立派な漢だよ。ボウズから伝えといてくれ』

『それ、喜びますかね？伝えたことで、私が睨まれたら船長に謝罪と賠償を要求しますよ』

『それこそ自己責任つてやつよ。まあ、何にせよ姉ちゃんとボウズに命を預けるわ。よろしく頼むぜ』

『こちらこそ。この艦のことは気にせず、逃げ切ってください』

ニツカは破顔一笑し、立派な敬礼をして通信を打ち切った。

- - - - -

僕はオペレーター席に戻り、ミミに話しかけた。

『ミミ。ミミ?』

『マスターなんて、あの年増と修羅場になって刺されて死ねばいいもん』

『ミミ?!』

『勝手に置いてくんだもん。マスターなんて嫌い』

おお、そこはかとなくシヨックが大きい。娘に「パパ、嫌い」と言われたらこんな悲しい気持ちになるのか。

『ごめんね、ミミ。』

娘だったら、頭をなでたりするのだろうか。

『悲しい? 頭なでる?』

『そういえば、考えたことが分かるんだよね。』

『うん。マスター、ミミに嫌いつて言われて悲しい気持ちになったの?』

『そうだよ』

『うーん、そっか。じゃあ、今回は許してあげる』

PAIに許してもらう人間というのは、客観的に見てどうだろうか。どう考えてもダメ人間だった。

『ありがと。そうそう、さっき敵が襲ってきてからの動きについて分析してくれたんだよね』

『うん。マスター、見る?』

『うん、見せて』

分析された敵の情報―艦隊編成、光学兵器の出力、装甲の厚さ、乗艦員数がオペレーター席のディスプレイに表示される。大きな数値

が並ぶ中、僕の目を惹いたものがある。

『乗艦員数が1?』

『うん。一人のパルスしか見えなかった』

『パルスが見えたの?』

『うん。マスターとこうやって会話してる時みたいに、パルスの流れが見えたよ』

『どこに?』

『うーんと…宇宙空間?』

言葉は理解できるが、内容が理解できない。少し、落ち着こう。

あの艦隊には1人しか人間がいなくて、パルスが宇宙空間で見えた…やっぱり分からないぞ。

ん?待てよ、そういえば、敵の動きは、マリアが我が軍の精鋭でさえできない動きと言っていた。どういうことだ?

我が軍にはどうしてできない?

人間には行動限界があるからだ。AIによる自動化がなされているとはいえ、オペレートするのはにんげんであり、人間が命令を受けてからの反応速度の遅延、キーを押すまでの時間、ミスを恐れての緊張によるエラーなどが行動限界を決定づける。訓練によって慣れることのできる限り早くなるが、上限はある。

なるほど、人間の行動限界を超えた艦隊運動、そして、乗艦員数。見える脳電磁パルス。僕の中で仮説が組み上がる。

『ねえ、ミミ?』

『なあに?マスター』

『ミミって、もしかしたら僕の脳電磁パルスがミミに伝わるのを邪魔することできるの?』

『うん、できるよ?』

『どうやるの?』

『うーんとね……』

僕の仮説が正しければ、僕にしかできないやり方で、敵と戦うことができるかもしれない。戦いの高揚感とは違った、よりよいプログラミングを発見した時のような快い緊張がみなぎる。

『ミニ、今から言うことをやっておいてくれる?とても大事なことなんだ』

『うん、いいよ、マスター。あ、でも』

『どうしたの?』

『マスター、お願いがあるんだけど』

『何?』

PAIにおねだりされる僕。字面だけみるとヘンタイそのものである。

『うんとね、すぐにでなくてもいいんだけど。ミニ、身体がほしいなあ』

それは無い物ねだりというものだ。しかし、僕は科学者を目指す者だ。あきらめれば、そこに科学の発展はない。試合終了なのだ。

『うん。僕の持てる力を注いで、ミニに身体を用意するよ』

僕の運命は、こうして決定づけられた。

8 ・クライ・フォー・ザ・ムーン（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

9・嵐の前

天頂方向を上、標準銀河横断面を基準として地球方向を北とすれば、我々が最短距離を取る場合、メディニカ星系に東南東方向下側から侵入し、恒星メディニカの東側を通って、北西方向上側に抜けるという進路を選ばざるを得ない。しかし、現時点で恒星メディニカの重力場は東側に傾いており、重力影響域に入ってから加速は通常よりもエネルギーを消費する。したがって、メディニカ星系に侵入する前の時点で最大速度を得、ちょうど重力影響域に位置するメディニカ星系第1惑星を利用した増速スイングバイ（すでに推力があるのでパワードスイングバイか）を行い、重力影響域での減速を減らすとともに、一気に亜光速まで加速し小惑星帯に突入することになる。

敵は、重力影響域まで計算していたわけだ。我々が亜光速で小惑星帯に突っ込んで来ることぐらいは誤差の範囲だろう。おそらく、小惑星帯を抜ける切る直前に300隻から500隻が密集隊形でルートをふさぐ形で待ち伏せているに違いない。これへの対策は、ある程度の質量を持った物体を亜光速でぶつけ、穴をあけてそこを突破するかしかない。僕が戦術シミュレーションでマリアの機動艦隊を破った手法である。バカの一つ覚えのような気がするが、戦略用兵器が搭載されていない軽戦闘艦にできる作戦は限られているのだ。

しかし、ミミの分析によって一つの可能性が浮上してきた。僕は、マリアに報告をする。

「艦長、相談があるのですが」

「あら、プライベート通信なんて気が利くわね。」

「傍聴の危険を防ぐためです。他意はありません。それよりも、仮

想ディスプレイを見てください」

「つまらないわね。…ん？これ、どういうこと？」

「私のPAIは、ご説明した通り特殊なものです。自分でもどのようなプログラミング理論に基づいて設計されているのか全貌は分かっています。そして、私のPAIは、様々なオプションを持っています。その一つが、生命探査機能です。調べた結果は信じがたいですが、あの敵艦隊には人間は1人しか乗っていない」

「信じられないわ」

「ええ。ただ、マリア先輩がおっしゃってたではありませんか。我が軍の精鋭にもこれほどの動きはできないと」

「うーん、なるほどね。複数の人間の行動限界を破ることができたのは、単数の人間が動かしているからということね。納得はしたくないけど」

「おそらく。原理は分かりませんが、敵は一人で艦隊を動かすシステムを持っているようです。」

「で、これを私に見せたのは、何か意図があつてののでしょうか？」

「理解が早くて助かります。実は、試したいことがあるんです。先ほどの作戦には支障を来たさないと思うので、許可を願おうと思ひまして。」

「ええ、許可するわ。」

「ええ！？まだ、内容をお教えしていませんが」

「ただし、内容を教える以外にも条件があるわ」

「な、何でしょう。奴隷になるのは無理ですよ」

「そんなこと言わないわよ。心外だわ」

かつて言ったことあるから懸念しているのだ。心外なのは僕の方である。

「条件はね……」

マリアから出された条件は、意外なものだった。別に、条件として出さなくてもいつもマリアが僕に無理やりしていることだ。まあ、

いずれにせよ生き残った後の話である。

「巨大質量兵器、用意できました。まさか目の前で、ショーン君が想像した兵器を見れるとは思いませんでしたわ。って、プライベートル通信中だったんですね。またまた、お熱い事で」

ベルタの報告がディスプレイ上に現れる。

「また邪推です、先輩」

「あら、でもマリアの嬉しそうな表情を見れば、そう推察しても致し方のないことですわ。ね、マリア？」

「う、うるさいぞ、ベルタ。…さて、そろそろ、メディニカ星系に突入するか」

ベルタは、声こそ出していないが、腹を抱えて笑っていた。

航行はいたって順調に進む。順調だ。順調に敵の罠にはまっていっているのだ。もちろん、敵の罠にはまらなければ、勝利も望めない。虎穴に入らずんば、孤児を得ずである。ちなみに、これは養母が言った言葉ではない。

『ところでさ、ミミ』

『何ですか、マスター』

『ミミなら、あの敵艦隊がやっていた動きができるかな』

『ミミ、一人で動かすんですか？それぞれの艦にミミの指示を受け取るレシーバーがあれば、できる思うよ、マスター』

『そうか、偉いね、ミミは。』

『えへへ』

『じゃあ、あの敵艦隊に乗っていた一人が、攻撃をする瞬間とか、攻撃方法とかパルスから読み取れるのかな？』

『うーん…初めてなら無理だと思うけど、練習すればできるように』

なと思うよ』

『ミミは、ガンバリ屋さんだからね』

『うん！マスター、偉い？』

『偉い。偉い。』

なるほど、ミミならできる。そして、ミミには敵の電磁パルスが見えた。ということは、警戒しておいてもいいだろう。

「艦長」

「なあに？ ショーン」

「できる限り、作戦のこととか、攻撃のことを考えない、ということとができますか？」

「その必要があるなら、するわよ」

ミミができて敵ができないという保証はない。ミミは視覚で電磁パルスをとることができる。攻撃のタイミングや、もしかしたらそれ以上のことを読み取られるかもしれない。

「ええ、未知の敵ですから警戒しておこうと思います。今回、艦長は号令なしでも構いませんか？」

「構わないわよ」

「え？ 『撃て！』とか言えないんですよ？ いいんですか？」

「ショーン、あなた、私のこと誤解してるわね」

あ、また獰猛な猛禽類のような表情だ。あとで、付きまとわれて色々と言われることが決まったようだ。本当に、口は災いのもとだ。

『ということ、ミミ。タイミングとかすべて任せるけど、構わない？』

『大丈夫だよ、マスター。ミミに任せておいて！』

艦は、第1惑星を利用したスイングバイで加速し、小惑星帯に向かう。亜光速航行に入るとき、僕ら宇宙孤児にはあまり違和感が無いが、惑星出身者の心身には極めて負担になると聞く。しかし、マリアもベルタも表向きは平気そうに見えた。ベルタは、たおやかな笑みを浮かべている。こんな時は、絶対心の中で、人を罵倒しているに違いない。マリアは、ニヤニヤしたり、時折頬を赤く染めてポーツとしたりしているが、何を考えているのだろう。

そうこうしているうちに、我が艦と商船団は運命の小惑星帯に入した。

9 嵐の前（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

10・既知の遭遇―未知との遭遇

我が艦の後ろに菱形陣形をとりながら4艘の商船が続いている。艦内から見れば、それは遅々とした歩みであるが、外から観測できるのであれば、一陣の風にしか見えないだろう。この小さな艦隊は既に加速を終え、巡航速度に入っている。ミミの示す緻密な航路計算がなければ、小惑星に衝突し、蒸発を遂げているはずである。

我々は、まだ艦内最外郭に質量兵器を隠している。戦術シミュレーションとは違って曳航しながらの加速は不可能だったからだ。曳航したままだと艦が十分な加速を短時間で得られないのだ。そして、もう一つ戦術シミュレーションと違う点は、質量兵器として使用するのが、惑星の残骸ではなく、氷の塊である。氷塊は、星系に侵入する直前、外周惑星の周囲を公転していた氷の残骸を切り取ったものだ。ベルタが興奮したほどその質量は大きい。

たとえ亜光速で航行していても、この小惑星帯を突っ切るのは、数時間を要する。惑星出身者には、辛い時間だろう。しかし、艦橋にいる二人の女性は、事も無げにすごしていた。胆力の問題だろうか、訓練を経てもここまで耐えられるようになるのは珍しい。僕は、この二人が宇宙の戦場に自らの身を投じる覚悟とその適性を目の当たりにし、正直に驚いていた。

『マスター、あと1時間程で、敵に遭遇する予定宙域です』

『ミミ、この会話は外部には漏れないの？』

『うん、絶縁物質の膜を張ることでそれを防ぐことができるの。どれだけ伝導性が高くても所詮、電気が源だから。この艦橋内に絶縁物質の膜を張ったから外部から電磁パルスが観測されることはないよ』

『そうか、じゃあ安心だ』

変化が現れたのは、30分後だった。ミミが持つ高性能観測装置の一つである、赤外線観測、電波観測ともにこの先に数百隻の艦隊が行く手を阻んでいることを示している。

僕は、マリアを見る。マリアは僕にうなずき返した。それが、この戦いの開始の合図だった。

ミミが報告モードで言葉を紡ぐ。

『…質量兵器、艦外に放出―商船団においても完了を確認―質量兵器、問題なく曳航中―当艦の質量兵器の照準設定―商船団の質量兵器、照準を当艦前方、敵艦隊上部に設定―照準誤差を修正…』

そして一呼吸おいて、最終確認を告げた。

『当艦の質量兵器、射出します。マスター、許可を』

「艦長、やっぱり号令を言っても問題ないようです。お願いします。」

「ああ。わかった……第一射、放て！」

ベルタが組み立てた、簡易カタパルトから、氷の塊が宇宙空間に吸い込まれていく。その先には、数百の敵がいる。我が艦から放たれた氷塊は、敵艦隊上方に逸れていく。氷塊は、敵艦隊を掠めて飛んでいく。そして、敵艦隊の上方にあった大きな惑星の残骸に衝突した。

大爆発が起きる。目視できるほどのまばゆい炎が上がる。

仮想ディスプレイには、氷塊から小さな金属片が敵艦隊を覆うように広がる様子が見える。ミミに用意して貰った絶縁体入りのチャフだ。

「第二射、いけます！」

僕が報告する。この機会を逃してはならない。

「全弾、放て！」

マリアは、間髪いれずに命じた。

商船団が曳航した4つの巨大な氷塊は、敵艦隊上段に向かう。商船団は、氷塊を放出したあと、その軌道を追いかけるように走る。敵艦隊は、予想どおり動かない。おそらくチャフの効果だろう。氷塊が敵艦隊にぶつかる。巨大な氷塊が4つも飛んできたのだ。凄まじい爆発が起きる。敵艦隊の上半分にいた150隻余りの戦闘艦がその巨体に根こそぎ巻き込まれた。

爆煙が晴れるや、そこに我が小艦隊が飛びこむ。敵艦隊と交差する直前我が艦は、商船団に追い抜かれた。商船団は、残存する爆風に船を乗せたのだ。熟練の読みがなければ、爆風に吹き飛ばされていくはずである。ニツカ船長の采配だろう。我が艦は、商船団の殿になる。絶妙のタイミングだった。

「ミミ、敵の旗艦はわかる？」

「うん。生体反応があるのはあの左下斜め前の大きな戦艦だよ。」

「じゃあ、あれをよく観察しておいてくれる？」

「はい！マスター」

敵の旗艦と思われるその戦艦は、重量級戦艦の中でも特大級である。主砲は、戦略級兵器だろう。主砲が動く。前方、商船団が狙わ

れている。

「艦長！俯角27度左三列目の艦が敵の親玉です！商船団が戦略級兵器で狙われます」

「ベルタ！撃てるか？！」

「マリアが叫ぶ。反応が早い。」

「当然です」

「ありったけの弾をあのかい戦艦に向けて…撃て！」

光学兵器が瞬時に着弾し、さらにミサイル群が弧を描いて、敵の旗艦に命中する。爆煙が舞い上がった。亜光速で航行中、ミミのようなPAIの制御がないのにも関わらず全弾を命中させた。これはもはや職人芸レベルだろうと僕は思った。ベルタの腕は超一流だったのだ。

攻撃の反動によって艦の速度は落ちる。半減といっても差支えないだろう。急ぎ再加速を図る。しかし、そのとき我が艦の前方に100余りの戦闘艦、そして気がつくとも後方にも同数の敵艦が回り込んでいた。チャフの効果が切れたのだ。水も漏らさぬ布陣。我が艦は一瞬の猶予も与えられずとも簡単に包囲されてしまった。下には、敵の旗艦もいる。あれだけの光学兵器やミサイルを撃ちこまれながら装甲に傷一つないようだった。

「我々の全力をここまで見事に破られると、かえって爽快ね。まあ、任務は果たしたし、あとは、カールがうまくやってくれるでしょう。私たちは、未知との遭遇に備えましょう」

「マリアは、僕とベルタを見て明るく笑った。」

10・既知の遭遇―未知との遭遇（後書き）

拙いお話を読んでいただいております。ありがとうございました。

11・明るい諦めの中で

「マリア先輩」

僕は、オペレーター席からマリアに呼びかけた。

「何？ ショーン」

「あの時保留にしたお願い事を、今してもいいですか？」

マリアに勝利した際に、なんでもお願いことを一つ聞くと言われていたのだが、僕はそれを断り続けていた。人気絶頂のマリアに、あまつさえ、辛うじてとはいえ、戦術シミュレーションで勝利し、それに加えてそれを理由に何かをねだるなど、命がいくつあっても足りなかったに違いない。

「うーん…ダメよ。ちゃんと生き残って帰ってから聞くわ」

「…わかりました。」

「物分かりのいい子は好きよ。でも、こんなムードのないところで、プロポーズしなくてもいいじゃない？ ベルタだっているのに」

「はい？」

マンガで言えば、僕は今デフォルメされた絵になっているところだろう。

「こんだけ一緒にいたものね、いくら鈍感なショーンでも私の魅力に気づかないわけがないわ。教官や軍の上層部と取引をして、連れてきたかいがあったわ。」

冗談かと思えば、そうではないらしい。得意の暴走独り言。視界の端でベルタが、腹を抱えて、指をさして大笑いしている。やめてください、先輩。とぼつちりは僕に来るんですから。

「あの、先輩？」

「なあに、私のショーン」

ふんわりとした綿のボールを投げてよこすようなイメージの甘い声。いつの間にか、マリアの所有物になっている僕。しかも、さっきツッコミを忘れましたけど、僕が実地訓練についてきたのは、相当な

特例ってことですか??それに、マリア先輩が取引っている場合、だいたい脅しが込みになっているんですけど?

「いやいやいやいや。マリア先輩。ちょっと聞いてください!」

「ええ。聞いているわよ」

まるで聞いていない。絶対、脳内お花畑で絶賛お遊戯中だ。

「先輩、このままだと僕たちは帰れませんよ」

「あ…そうだった。シヨーンの声の聞いたら、戦いのこと忘れちゃってたわ。」

ベルタはついに声に出して笑った。

「敵がどのような言語、文化を持っているのか分からない限り、白旗を上げることすら危険です。」

僕はようやく説明にこぎつけた。

僕は、艦長席にやってきた。ちょっと気まずそうにするマリア。僕だっけ気まずいですよ、全く。とはいえ、マリアは優秀な人である。すぐに軍人として思考を巡らせ始めた。

「ですから、今から敵との交渉を一任してもらえないかとお願いしたかったんです。」

「へ?そんなことに、私へのお願い事を使おうと思ったの?」

「ええ。本来、艦長がすべきことを、上級軍曹ごときが一任してもらうわけにはいかないでしょう」

「…シヨーン、あなたは私が反対すると思ったわけね?」

凄まじいプレッシャーを感じる。怒っていらっしゃる?

「シヨーン…」

地獄の底からの重低音のように僕には聞こえる。

「あとで、艦長室にいらっしゃい。教えてあげるわ」

「な、何をでしょう」

無言で僕を睨むマリア。怖い。目的語がないことが怖い。しかし、それも生き残ってからだ。ただ、生き残った上で、この世に生まれ後悔を知ることになるらしい。理不尽にもほどがある。

どつと疲れてオペレーター席に帰る。

『マスター』

『どうしたの？ ミミ』

『ミミがあ那年増から守ってあげる』

ああ、なんて優しい子に育ったのだろう。

『…たとえどんな手段を使っても』

黒い！ 黒いよ、ミミ！ いつの間にそんな娘になったの？

何か、敵に囲まれ銃を突きつけられている緊張状態のはずなのに、何でもこつと緊張感がないのだろうか。こちらに打つ手がないゆえの、明るいあきらめ。これは、マリアやベルタの醸し出す雰囲気、つまりは仁徳だろう。暗く思いつめても、事態は打開できない。開き直る方がいい時は確かにある。

『マスター、敵から通信が来たよ』

『ちなみに、ミミにしか分からない方法で来たんだね？』

『うん。たぶん古代地球語だと思う』

僕は、古代地球語というのをよく知らないが、そのいくつかの単語はこの時代にも残っているとされる。「ヘンタイ」ももしかするとそうなのかもしれない。

『そう。で、敵は何て言ってるの？』

『えーとね、おとなしく投降すれば、乗組員を捕虜として遇し、命は保証するって言ってる。回答期限は10分後だって』

「艦長、10分以内に投降するよう勧められていますが」

僕は、マリアに通信をする。

「Noと言いたいところだけど、何か手はある？」

「やってみたいことがあるのですが、構いませんか？」

「さつきも言ったとおりあなたに任せる。あなたのPAIにしかできないことがあるんでしょう？私は、あなたがやることなら私やベルタのためになるに違いないと思ってるの。……さつき、私本当にシヨックだったのよ。だから、ちゃんと言葉にしておくわね。私はあなたを全面的に信頼している。軍人としても、一人の人間としても、ね」

「…ありがとうございます」

僕は、この人の信頼に足るかとか、そういうことを考えたこともなかった。僕には、自分が宇宙孤児であり、どう足掻いたとしても差別される側なのだという自覚、いや、諦めがある。それは簡単にぬぐい去れるものではない。成長するにつれて有形無形の侮蔑の眼差しや手痛い裏切りに遭ってきたのだ。だからこそ、できる限り波風は立てないし、目立ちもしたくない。それが僕の行動原理だったと改めて思う。ただ、マリアやベルタには、そういう気遣いは要らなかった。そういう気遣いをさせないようにしてくれていたのだと思う。この人たちの前で、徐々に人間としての振る舞いを取り戻しながらも卑屈な行動原理をぬぐい去れない僕は、この人たちにはどのようなに映っていたのだろうか。この人たちの信頼に足らんとしてこなかったことは、この人たちに対する裏切りだったかもしれない。そんな思いがよぎる。

「私にお任せください。マリア先輩」

それは、僕がマリアやベルタを守ろうと決めた瞬間だった。

『ミミ、観測してた？』

『もちろんだよ。マスター』

『じゃあ…』

『うん、ミミにもできそうだよ』

『そうか！ミミは偉いなあ』

『えへへ、マスター、ミミ偉い？』

『うん、偉いよ。……じゃあ、始めようか』

『はい！マスター』

ふっと空気が凪いだ。次に高音域の耳鳴りがする。頭が痛む。僕は目を閉じる。音が安定する。

痛みが薄らぎ、ゆっくりと目を開けるとミミの声が聞こえた。

『マスター、敵艦隊の乗っ取り完了しました』

11・明るい諦めの中で（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

12・宇宙へそらに住まう者

結果から言えば、旗艦を残してそれ以外の敵艦隊をミミの支配下に置いたのである。ミミには、旗艦から各艦に電磁パルスが通っているように見えていた。まるで僕とミミが会話するときに流れる電磁パルスのように。原理から言えば、敵が用いている電磁パルスを分析し、こちらから敵の旗艦からの出力以上の出力を持って、同質の電磁パルスを流せばいいのだ。ミミに敵の旗艦を観測させたのはこのようなわけだった。

『ミミ、僕らの艦の前面に艦隊を配置。各艦の主砲にエネルギーを充填。照準を敵旗艦に合わせて』

『はい！マスター』

信じられないほどに素早く柔軟な艦隊運動で、僕の命令が実行される。もし、これを軍事研究家が眺めていたら、卒倒するに違いない。ミミの処理能力の高さがあつてのことだろう。補給基地を襲つたあの艦隊の陣形再編の比ではない。

さて、これでチェックメイトになるだろうか。チェックメイトなら平面であるはずの盤面に上や下から駒を持つてくるような強引な裏技だったと言える。しかし、我が艦のミサイルでは、傷一つ付かなかつた敵旗艦である。200隻の戦闘艦といえども、致命傷は与えられないかもしれない。なにせもはやチェスのルールは破られたのだから、何があつてもおかしくない。

『マスター、通信です。直接マスターにつながよう言われています』

『僕に？じゃあ、同時通訳できる？』

『マスターのためにがんばります』

『頼むよ』

仮想ディスプレイに表れたのは、この世の存在とは思えないような人物だった。透き通った身体から光を発しているように見えた。眩しいと思った瞬間、急に光が消える。そこには、ストレートの長い黒髪、黒目の小柄な女性（というか、少女と言った方が正確だ）がいた。

『やはり、あなたには効かないらしいな』

「目くらましでしょうか？」

『いや、催眠だよ。そちらの二人には効果があったらしい。』

振り返ると、確かにマリアとベルタは眠ってしまっていた。僕は思わず目を細める。言い知れぬ怒りが湧いてきたのだ。自分がこれほど怒りの感情をもつとは自分でも少し驚き、自制しようとした。

『誤解しないでいただきたい。別に暗示をかけたわけじゃない。少し眠っていてもらおうと思ったただけだ。理解できる者にしか話せないことがあるからな』

「…で、どのようなお話を？」

『我々の正体』

昨日の夕食の献立を答えるように軽く言う。

「それは、興味深いですね」

『まあ、あなたが警戒するのも無理はない。私としては、絶対負けるはずのない戦いなのに、あなたにこうして追い詰められてしまった。取引をして見逃してもらおうと考えても、当然だと思っが』

交渉にはブラフがつきものである。追い詰められていると言うが、奥の手がないとは限らない。いや、奥の手があるからこそ、交渉に持ち込もうとしていると考えるべきだ。

「私が追い詰めたのではないかもしれませんよ。私は艦の責任者で

はありませんので」

『そのような韜晦は無意味だよ、ミスター。あなたが私の艦隊を乗っ取る能力を持っているように、私にも話している相手が嘘をついているかどうかを見抜くぐらいの能力はある。それに、私もあなたも宇宙に住まう者だ。仲良くとまではいかないが、同胞として最低限の礼儀は尽くそうと考えている。そこは信頼していただくほかはない』

「なるほど。無意味な腹の探り合いはやめようと言いたいわけですね」

『そういうことだ』

こちらの目的は、少なくともマリアとベルタを安全に惑星連盟に帰還させることだ。僕も覚悟を決めた。土俵に上がってやるうじやないか。

「分かりました。少なくとも、あなたも私もこの話合い中に騙し討ちをしようとしていないということを共通の土台にしましょう。」

『無論だ。まずはそれで構わない。で、いいだろうか？我々の目的と正体を話しても』

「ええ、どうぞ」

『我々は、惑星連盟の人が言う『宇宙世代』の子孫なのだ』

少女は、事もなげにそう言った。

12・宇宙へそらに住まう者（後書き）

拙いお話を読んでいただきましてありがとうございました。

13・ミッシング・リンク

別の進化を遂げた人間だとか、地球外由来の人間種だとか言われた方がまだ信じられる。この未知の存在が、我々の歴史に空いた大きな穴とも言うべき謎と関係があると言われても、僕の常識が納得することを阻んでいる。

『信じるか、信じないか迷っているような顔だな。是非もない。我々は、ここしばらくの間、あなた方の文化圏に生きる者の調査をしていた。だから、私はあなた方が語る宇宙世代の物語も、その後の歴史も、宇宙空間で子をなすタブーも、そして宇宙孤児の扱いも知っている』

「…海賊行為にしてはスマートなやり方だと思っていました、やはり目的はサンプリング調査だったんですね」

僕は無意識のうちに話をそらしてしまう。僕は言いようのないひどく恐ろしいことに会ったような感覚に陥っていた。

『誤解のないように言っておくが、拷問や催眠誘導など、あなた方がやるような尋問などはしていない。我々は地球世代から続く、捕虜の扱いに関する規則を順守している。』

「別に私は、惑星連盟を代表してあなた方を非難する資格などありませんよ」

『しかし、心情的には別だろう。同胞をぞんざいに扱われてうれしく思う者はいないからな』

そういえば、この少女の話し方は、同時通訳しているミニが設定したものだろうか。見た目と口調がそぐわないことにいまさら気づく「なるほど。攫ったものを政府に通告せず捕虜扱いにしたことや、その捕虜の処遇に関してここで議論しても益のないことです、ので、保留しましょう。しかし、『自分は宇宙世代の子孫だ』と言われて『はい、そうですか』と言えるほど、私は想像力豊かな人生を送っ

ておりませんので、簡単には受け入れられないことは確かです」

そう、宇宙世代の問題は、僕の出自やこれまでの人生に関する前提であり、私とこの世界をつなぐ重要な物語なのだ。世界の関節を目の前の他人に外されるのは誰だつて御免被るはずである。でも、僕はこの物語に納得のいかないものを感じていたのも確かだった。フオークローアそれゆえ僕は、未知を既知に変えゆく興奮と恐怖との狭間で揺れ動いていた。

『私とあなたの時間にも限界がある。詳細な証拠は、通信機器に送る故、後からそれを確認されればよからう。いずれにせよ宇宙世代の物語は作られたものだということだ。我々の祖先は、それなりの理由があつてあなた方の祖先と袂を別つたのだ。』

「証拠とは、どのような？」

『移民船ヴァレンシアの全レコード』

少女の言う証拠が本当なら、その話を信じるしかなくなるだろう。我々の主星にたどり着いた移民船がヴァレンシアであり、主星到着後、歴史の中でそのレコードはほとんどが失われたと言われる。もちろん、少女の言う証拠がねつ造されたものでないという100%の保証はない。しかし、全レコードを矛盾なく捏造するのはほとんど不可能なのだ。

僕は深呼吸を1つした。…確かに、祖先が地球を旅立ったとき、既に人間が持つ科学技術の水準は現在と比してもそれほど遜色ないほどだった。少なくとも現在の我々の科学技術の基礎となる枠組みは既に出来上がっていた。これはほぼ間違いない。にも関わらず、宇宙世代が主惑星に到着する前にことごとく死滅してしまったというのは、論理的にはあり得ない話なのだ。そのような論理的矛盾を指摘されると、医学的問題や心理学的問題として片付けようとする

人が多いが、それに従ったにしても論理の飛躍がありすぎる。とすれば、どこかで宇宙世代の子孫が生きていてもおかしくはない、可能性としては。これが論理的帰結だと僕自身は、科学者として、そう考える。

『あなた方には、我々の祖先の軌跡もあなた方の祖先のそれも確かめるすべはどこにもなかった。それゆえ、悲劇としての宇宙世代が物語として浸透していてもおかしくはない。しかし、これほど強固な前提、もつと言えば宗教的信念に近いレベルで信じられているのはどうしてか、あなたは考えたことはあるか？』

「……人間は根なし草にはなりたくないからですよ。だからこそ、自分のルーツに関する物語は、たとえそれが矛盾に満ちた神話でも守りたい。ただし……」

『ただし、それへのこだわりは外部からの脅威にさらされたときに最も先鋭的に表れる、ということだ。しかし、あなた方に外部からの脅威など、我々と接触するまで、いや、現時点でさえないと言ってもいい。その一方で、その矛盾した物語にこだわる多数の人々がいる』

「……何が言いたい」

『お分かりのはずだ。あなた方の文化圏に住まう者は意図的、戦略的にこの物語にこだわるよう、仕向けられてきた。内なる外部の脅威、あなたのような宇宙孤児という異端が存在することだ』

それまで無表情だった少女が口元をゆがめてほほ笑んだ。

13・ミッシング・リンク（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

14・検証に耐えられぬ仮説

その微笑みを見て、僕は我に返った。邪悪なもの、というのは言い過ぎかもしれないが、少なくとも異質なものをそこに見たのだ。

「確かにあなたの言う通りかもしれない。しかし、それはあくまで無限にある可能性の1つの答えでしかありません。断定するには情報が足りない。そして、断定するほどの証拠をあなたは出せない。」

「……どうしてそう思うのだ？」

「出せるなら、既に証拠を出しているでしょう。あれだけ僕らがひっくり返るような宇宙世代の秘密をあつさりとはらして、説明は後からでした。それは確たる証拠があったからでしょう。その一方で宇宙孤児の話は状況証拠と推論から結論を出そうとしている。それは推論の域をでないからではありませんか？」

「……」

少女は無然した顔で黙り込んでいる。

「しかし、私が分からないのは、私なんかには揺さぶりをかけて、たとえ、私に惑星連盟に対する不信を抱かせても、あなたにとってどんなメリットがあるのかということです。」

「……分からないはずがなろう。それは一種の謙遜か？そうでなければ、そこまで考えることができて、なぜわからない？」

「うーん、……やはり、分かりません。自意識過剰でなければいいのですが、あなたが私を味方につけようとしていると考えても、私程度の人材など惑星連盟には掃いて捨てるほどいますし……」

「掃いて捨てるほどいるわけがなろう！」

少女は叫んだ。怒りだろうか、プルプル震えている。

「軍務司であるこの私が、銃口を突き付けられるなどそうそうあったまるか！宇宙に住まう者の剣と盾そのものである私が！何たる屈辱！」

駄々っ子のように地団太を踏んで叫ぶ少女。ああ、びっくりした。ぶつくさぶつくさ文句を言っている。目尻には涙が浮かんでいるように、ちよつとかわいそうになってきた。さっきまでの冷静な交渉役はどこに行ったのか。「軍務司」とは何だろう？地位みたいなものか。確かに、艦隊を率いることができる少女だ、何らかの役に就いていておかしくない。

「いやいや、私は訳あって人と違う道具を使いますが、ただそれだけの、本当に普通の技術者志望の士官学校生なんです。そもそも、勝負は時の運と言うではないですか、お嬢さん」

何て呼べばいいのかわからず、「お嬢さん」と呼びかけた。何か、こう慰めたくなったのだ。女性、特に年下の女性に甘いのは僕の悪い癖なのかもしれない。しかし、もちろん僕はロリコンではない。

『お、お、おお』

「？」

『お、お嬢さん?!』

「ああ、失礼でしたら謝罪します。なにぶん、そちらの文化は全く知りませんもので」

『そ、そ、そうか…私を呼ぶときは、ミドリと呼びなさい。キリエ・ミドリ。キリエがファミリーネームだ』

「はあ、ミドリ様ですね。私は、惑星連盟軍宇宙大学校工廠科の学生で今は、臨時で上級技術軍曹しておりますシヨン・ヒルガと申します。ヒルガがファミリーネームです。」

『そうか。私は軍務司、そちらで言う宇宙艦隊管区司令を務めている』

「……はい？」

かんくしれい？管区司令か……ってええ?!こんな僕よりも年下に見える少女が、惑星連盟では中将を以て充てる相当な軍幹部?!ちよつと、そつちはどうなったんの？年端もいかない子どもに戦争させるなんて、それって児童虐待?それとも、僕よりもはるかに年

齡が上なのか？こんな疑問が湧いてない交ぜになって口に出た言葉は「はい？」の一言だった。

14・検証に耐えられぬ仮説（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

15・ロストテクノロジーと宇宙世代の軌跡

『あなたの驚きは、何に由来しているのだ？』

「あなたのような若くて可愛い女性が、軍人で、しかも軍幹部ということにです」

余計な言葉まで出たような気がするが、若い女性と対極に位置するのが軍幹部というものだ。どれだけ女性の社会進出が進んでも、戦争の担い手が男性主体であることに変わらない。女性の自己決定権を主張する人のなかには、女性が軍人として戦う権利を主張するラディカルな人もいたが、それに対しては大きな賛同は得られなかったのだろう。もちろん、軍内で女性の兵士や士官はたくさんおり、待遇も男性と同じだが、軍幹部となると、グッと女性の率が下がる。敵はそうではないということなのだろう。

『か、か、か、可愛いだとか？』

大きな目を見開く少女。意外と表情豊かで人間らしい。ちょっと親しみを持つことができた。

「そんなこと言ってしまいましたか、失礼しました。ただ、我々の文化では珍しいと申し上げたかったのです」

『い、いや構わぬ。あなたに容姿を誉められたこと、悪い気はせん』

「はあ、それは安心しました」

『話を戻そう。我らの間では、能力が全てなのだ。そこに年齢や性別などが関与する余地はない。全ての職業がそうというわけではないが、特に努力だけではどうにもならない天賦の才能を要する職業は完全なる能力主義だ』

「でも、それで問題は起きないのですか？」

『才能に対しては科学的な測定手段が確立されている。紛争もあるにはあるが、紛争を起こすリスクは高い』

「リスクが高いにせよ、人間である限り、嫉妬や悪意と無縁でいられるものではないと思うのですが」

「もちろんだ。しかし、我々は、同胞の数が多いわけではない。一人に課せられる職責や使命も必然的に重なる。それゆえ、嫉妬で人を追い落とす必要がない。能力を発揮する場は一つではないからな」

「しかし、宇宙世代から既に1000年になろうとしています。世代で言えば、40世代前後でしょう。環境が安定していれば同胞は幾何級数的に増えていくはずではありませんか？・・・いや、ひょっとして遺伝子操作ですか？」

遺伝子操作技術は、我らにとって完全なロストテクノロジーだ。

地球世代は、科学技術の粋を移民船ヴァレンシアに積み込んで太陽系を旅立った。そのなかには当時、科学技術の最高峰と謳われた遺伝子操作技術もあったはずだ。しかし、我々の祖先が主星に到着したときには既にその全てが跡形もなく、消え去っていた。ミドリの祖先が、何らかの理由で持ち去ったのかもしれないと思ったのだ。

『そうとも言えるし、そうでないとも言えるな。人が宇宙空間に適応するのはとても過酷なことだったのだ。我らの祖先は、数世代かけて遺伝子操作技術によって宇宙空間で生きる術を獲得した。しかし、それと引き換えに犠牲にしたものも甚大だった』

少女が語ったのは次のような物語だった。

宇宙世代は宇宙放射線の影響で子を為すことが困難だった。これは地球世代が誇る医療技術や遺伝子治療によってもどうすることもできなかった。そこで、彼らは加齢の抑制と寿命の延長に手をつけた。宇宙空間で生まれた世代も、世代を経ても生殖能力の強化には至らなかった。こうして宇宙世代は、人工爆発も起こることなく、世代

交代が緩やかに進行することとなった。

宇宙世代は、目的の惑星が近づいてきたとき、惑星での自らの適応能力を予測した。その結果は惨憺たる有り様だった。彼らは、宇宙空間という極めて過酷な環境に適応することに特化しすぎたのだった。

『こうして、我らの祖先は、移民船を離れ、宇宙に住まう者としての生活をはじめたのだ。』

「なるほど。しかし、宇宙世代が惑星到着世代に遺伝子操作技術を全く遺さなかったのはどうしてだったのでしょうか」

『正確なところは推測するほかはないが、これから希望の地に住まう者に、宇宙空間に再適応する過酷さを経験させなくなかったのではないか。自らの経験から、人類種の発展に遺伝子操作技術がかえって悪影響と考えたのかもしれない。彼らの身に起きた悲劇を考えれば、少々感傷的な対応をしても致し方なかったのではあるまいか』

「それは納得できる話です。遺伝子操作技術は宇宙に住まう者にこそ必要で、地上の樂園に向かうものには必要ないと考えたというのは、あり得るでしょう。・・・なるほど、あなた方がやっていたサンプル調査というのは、遺伝子検査ですね？そして、私たちの遺伝子に目をつけた」

『……それも目的の一つではある。それは我らのエゴイズムに満ち溢れた目的だ。即物的だし、私自身は吐き気がする思いだ。しかし、話はそう単純ではないのだ』

「どういうことですか？」

『あなた方には我ら以外に敵が存在する。出会うのは時間的な問題だろう。10年以内には戦端を開かざるを得ない。シヨン・ヒルガ、あなたに出会うまでは光明も見出せなかったが、いずれにせよ今のままではあなた方は負けてしまう。しかも、その敵は我らにとっても、極めて危険な存在なのだ。我らのエゴイズムに満ちた目的

は差し置いて、できる限り早く共闘関係を築かねばならない事態になっている。シヨーン、あなたに協力を仰ぎたい」

結局、僕を揺り動かしたのは、驚愕すべき真実などではなく、少女の真剣な瞳と切迫した声だったのだと、僕は後に回想することになった。

15・ロストテクノロジーと宇宙世代の軌跡（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございました。

いつも読んでくださる方、お気に入り登録をしてくださった方、心からの感謝を込めて。

16・戦乙女たち（前書き）

読んでくださる方に心から感謝を込めて。

16・戦乙女たち

「ちょっと待ちなさい！」

今、出てこられるとややこしい人の声が聞こえる。

「なんか気がついたら面白い話をしてるじゃない。でも、ショーンを味方にしたいのなら私を通してもらおうかしら」

ああ、やっぱりややこしい。いずれにせよ、マリアが交渉役になった場合、僕がフォローしなくてはならないことが山のように増えるのだ。

『ミミ、一応、マリア先輩の声も向こうに通訳してもらえる？』

『はい！マスター』

『あなたは、臨時の艦長。彼はその臨時の部下に過ぎない。どうしてもあなたを通さなくてはいけない』

「それは……もちろん、私とショーンとが将来を誓い合った仲だからよ」

もちろん、嘘である。あるいはマリアの脳内での話である。

『……それは真実なのか？』

少女は僕に尋ねる。なんかこの娘、眼力強ええ。真実かと聞かれれば、そうではないので、僕は首を横に振るしかない。マリアが後方で強烈なプレッシャーを以て僕をにらんでいるような気がする。いや、確実ににらんでいるので、僕はマリアのほうを見ない。絶対に見るものか。

『どうやら違うらしいが』

「……まったく、ショーンは照れ屋さんなんだから。」

マリアの脳内で、勝手な解釈がなされる。

「でも、あんたの言葉からすれば、ショーンの力を借りて、10年以内に我が軍をその強大な敵と戦えるようにするってことでしょ？」

『そうだ。彼の力があれば敵に勝てるかもしれない。貴様たちが最初所属していたあの小艦隊にできなかったことが、彼にはできた。現に私は銃口を突きつけられている。一方、我々は戦うことはできるが、圧倒的に数が足りない。敵に勝つには、純粋な戦力が不足しているのだ』

「そう。…なら、私の力も貸してあげるわ。」

『ほう、貴様にどんな力があるというのか』

「私なら、数年内に軍内の誰にも手が出せない独自の部署を作ることができる。実際、あなたのためじゃなく、そうするつもりでいたし。つまり、軍内にあなたたちに協力する集団の橋頭堡を作れるってことよ。それがなければ、我が軍を抜本的に改革して、強化することなんてできないわ。それとも何か非人道的な手段でも採るつもり？ そんなことショーンは望まないわよ」

『む…そなたの言うことに一理あるな。しかし、それをどうやって実現するのだ？ 妄言なら誰でも吐けるぞ』

「私が現惑星連盟軍宇宙艦隊参謀総長の娘だからよ。訳あって母親の姓を名乗っているけどね。今の惑星連盟軍は、残念なことに家柄や派閥が物を言う世界なのよ。でも、この際利用できるものは利用すべきだし、私たちの世界が崩壊するのを黙って見ているのは私の性に合わないわ」

僕は、マリアの出自を既に知っていたが、マリアの口からそれを聞くのは初めてだった。

『なるほど、それなら合点がいく。…そなたにも協力をお願い申し上げます。非礼を許されよ』

「別に気にしてないわ。マリーベル・フォーゲルトよ。でも、ショーンは私のものだから手を出さないでね」

『キリエ・ミドリだ。しかし、あなたは法的にショーン・ヒルガの自由を束縛できない。無論、私の自由もだ』

「『ふふふ…』」

二人とも友好的な笑みを浮かべているが、そこに火花が散っている

ように見える。主に僕の身柄の自由に関してというのが納得できない。

「また、面白いことになってますのね」

ベルタがいつの間にか真後ろに立っていた。

「当事者である僕の意見は聞かずに、僕の自由に関する議論がなされるのには一タツツコムのも疲れましたよ。って、先輩も、音もなく後ろに立つのはやめてください」

「暗殺術も乙女の嗜みですわ」

「どこの世界の乙女ですか」

「いずれにせよ、男の意見も聞かず、争ってばかりの女には魅力を感じないわよね。うん、そうよね」

「男の」から急に大きな声で言うベルタ。僕は何も言っていない。

「困ったことがあったら、いつでもお姉さんに言うのよ」

囁くベルタ。いつも以上にたおやかな笑みを浮かべ、優雅に去っていく。あの行動、絶対に自分が面白がりただけだ。

「シヨーン」

『シヨーン・ヒルガ』

マリアとミドリが同時に僕に呼びかけた。

「『あなたはどうしたい？』」

ベルタが隠れて腹を抱えて笑っているだろうと僕は思った。

16・戦乙女たち（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございました。

もしよろしければ、感想、ご指摘などくださいます。

17・僕という宇宙孤児の憂鬱

僕は思った。

僕らの祖先が地球を旅立って1000年余りが経っている。惑星連盟が現在のように各星系政府との間で連邦制をとることができたのも、宇宙軍が常備軍として整備されたのも、星系間移動・通信技術の進歩という技術的な側面と、星系同士での紛争にかかる戦費がそれこそ天文学的な金額に上る一方で、主に資源分配や経済的側面によって星系単位で引き籠ることができないという事情に由来する。しばしば起こる星系政府間の紛争によって星系政府がいくつかの星系政府間連合に統合されてきたことや、爆発的に増大する宇宙孤児対策が必要だったことも背景として挙げられるだろう。やはり、そこには外敵の関与など一切ない。改めて考えて見るまでもなく、外敵はおとぎ話やゲームの中での存在であり、真面目に議論することなどないのだ。連盟政府や軍の中枢にいる者は、今でも自分たちとは別の人類との交渉、あるいは交戦に対する危機感はないに違いない。画面の向こうの少女が敵と呼ぶとおり、かの人類とは、交渉の余地はないのだろうか。

そこまで考えて、この考えがあまりにも愚かしいことだと思いいたった。一定の実力のない者が蹂躪されるというのは、人類の歴史で明らかだ。もちろん、実力というのは軍事力、経済力、技術力、国民性や政治体制を含めた文化力など総合的なものだが、侵略者を相手取る場合には、まず目に見える軍事力がどうしても必要となる。そうでなければ、交渉のテーブルすら用意できない。

ミドリによれば、我々の軍事力では侵略者に敵対することすら叶わないという。それは、フォーツバニア少将が、ミドリの仲間の艦

隊に、ほとんど損害を与えられなかったことで証明されている。では、敵の力とはどれほどのものなのか。協力するのはやぶさかではないにしろ、情報がなければ、僕らを取りうる方法を検討すらできない。

「ミドリ様、」

『堅苦しいぞ。ミドリと呼べ』

「では、ミドリさん、私も自分が所属している国、というか故郷と
思っている場所が蹂躪されると聞けば、微力ながらも協力しよう
と思います。ただ、ミドリさんのことを信用していないわけではあり
ませんが、その『敵』という奴は、どのような集団で、どれくらい
の力を持っているのか。そして、なぜミドリさんたちの敵になるの
か。この辺りを教えていただかないと、答えを出せそうにありませ
ん」

結局、僕は率直に聞くことにした。

『ふむ…その辺りは道々教えるでしょう』

「道々？」

『そうだ。私は、そなたらとともに行く』

「一緒に？惑星連盟に？」

『そうだ』

「なぜに？」

変な疑問語になってしまった。

『決まっておろう。それが手っ取り早いからだ。急がねばならんし、
協力体制を築くにしろ、お互いのことを知る必要があるだろう。そ
れに、私は我らと惑星連盟に関する全権をゆだねられておるからな
この程度のことは予測の…』

「いやいやいやいや。ちょっと待ってください」

『いや、待てぬ』

にべもない。これまでの会話というわずかな情報だが、ミドリはこ
ちらからの質問をそでにする人ではないはずだ。

「話を聞いてください」

『時間があればそうしている。そろそろ、お前たちの仲間がそなたらの捜索と現場検証のためにやって来るのではないかな』

うつかりしていた。味方の艦隊が到着すれば、状況はややこしくなる。味方の艦隊からすれば、何が何だかもわからないこの戦況を後でどう説明すればいいのか。いや、最悪の場合、僕らごと攻撃を受ける事態もあるかもしれない。それを避けられたとして、ミミのことを公にできないので、誰もが納得できる辻褄の合う説明はできない。さらに、ミドリはこの場から逃走するしかなくなり、今、交渉のテーブルが上がっている話は破談になる。そうなれば、正体不明の強大な敵に対処するために、徒手空拳で準備をすることになるだろう。つまり、味方に追い詰められているのだ。まるで一か八かの賭けのように、十分な情報もないままに決断を迫られている。

「とりあえず、一緒に来ればいいじゃない」

マリアが意外にもそんな風に答えた。

「マリア先輩のことですから、僕の懸念を知った上で、そうおっしゃっているんでしょう……であれば、僕は、ミドリさんが同行することにあえて反対はしません。賭けのようなものですが、そっちの方が、最悪の事態は避けられそうですし。しかし、マリア先輩、こんなことを軍にどう説明するのですか？」

「ふふふ…そこは私に任せなさい」

マリアは、満面の笑みを浮かべた。マリアのファンの間では恒星ヴァレのような笑顔と言われていると聞いたことがある。これを聞いてから、僕は恒星ヴァレへの感謝の思いが消えうせてしまった。マリアがこのような顔をするときは、たいてい僕の神経と胃壁を削り取ることになるのだ。この人の恐ろしいところは、さも当然のように僕のフォロ―込みで計画を立てることであり、僕は、その度に冷静に臨機応変に現実的に対処をするという苦行を求められる。しか

し、僕は、もはや運命に逆らうことをあきらめかける自分がいるのを感じ、そのように感じたこと自体にテンションが下がる。

ああ、憂うつだ。たぶん決断の方向性としては悪くないのに、僕はため息をつかざるを得なかった。

17・僕という宇宙孤児の憂鬱（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございます。

18・帰還と旅立ち（前書き）

第1章はここで一区切りです。

18・帰還と旅立ち

僕は、新居に帰ってきた。

もう一生分の神経を使った。しかし、もう一生こんなに自分の頭と身体をコントロールすることはないだろう。マリアに付き合ってたんな目に遭う度に思うことを今日も思う。また、数日間は胃痛とともに過ごすことになるのだろう。

『ミミ、ミミ』

『なあに？マスター』

ああ、癒しの声だ。しかもミミはちよつと上機嫌だ。

あの後、道々、ミドリから敵のことを聞き、こちらのことをミドリに打ち明けたのだ。全てを語るには時間が足りなかったが。こちらから打ち明けたことの中には、当然、僕の出自と使った力のことが含まれた。僕の力といっても、それはミミそのものだ。だから、ミドリにミミを「紹介」したのだ。意外にも、二人の少女の話は弾んだようで（僕にはどのような言語でどんなやり取りがあったのか全く分からなかった）、それからミミはすごく上機嫌だ。

『機嫌がいいね、ミミ』

『うん！だって、今回マスターのお役に立てたし、これからも役に立てるもん！』

ああ、なんていい娘に育つたのだろうか。やはり宇宙空間での非行化は幻想だったのだ。戦いは人の心を荒ませるというのも納得できる。まだ10歳の少女に戦場はきつかったのだ。そうに違いない。

『あの年増からマスターを守る方法もミドリから教えてもらったし』
『な、何聞いてんの？！』

っていうか、僕のミミに何を教えてんだ。あの宇宙人め。

ミミには清らかに育ってもらいたいのだ。しばらくミドリとの接触を禁止しようと心に固く誓った。

「宇宙人で悪かったな」

背後から別の少女の声。ミミに比べて少し低めの透き通るような声だ。慚然とした表情を浮かべているのが見なくても分かる。ミドリが入ってきたのだ。

「なるほど、お兄ちゃんは、私の声がお気に入りか？妹の声に欲情するとは、とんだヘンタイだな」

誤解のないように言うておくが、好きでミドリと兄妹役を演じているわけではない。決して「お兄ちゃん」なんて呼ばれて喜んでるわけじゃないからね！というのは本当に冗談で、マリアが用意した設定のせいなのだ。あの後、ミドリを我が艦に移し、マリアは驚愕の設定を告げたのだ。

「ミドリさん、ここではその設定はやめてくれませんか」

「断る」

「なぜに？」

また変な疑問語が口をついて出る。

「シヨーンは、この設定でないと私にため口をきかぬだろう。それにこの設定を気に入っておる。『半数を失った我が艦隊は逃走し、逃げ遅れた艦からそなたらの艦が救難信号を受け、見捨てるのも軍規に反するため、救助に向かった。その艦内には、宇宙海賊に攫われた宇宙孤児と思われる少女がいた。少女は、駆け付け救助してくられたシヨーンが生き別れの兄であると言い張り、兄であることを否定しても聞き入れない。症状が安定しない失語症もみられ、精神的ショックが大きいと推測される。』ふむ、なかなか面白い設定ではないか」

「もういいですよ。やっているこっちはヒヤヒヤものでしたよ。…話を戻しましょう。知りあって間もない人で、しかも他国のお偉いさんにため口をきけるほどの無謀さは僕にはないんですよ」

「では、その他国のお偉いさんの機嫌を損ねないために、この兄妹設定を貫くか、そのバカ丁寧な口調をやめるか、どちらかを選ばせてやろう」

なんて悪辣な！というほどのこともないので、僕は後者を選んだ。

「わかったよ。…ミドリ」

「うむ、それでよい。ともあれ、これから長い間になると思うが、世話になる。」

「こちらこそ、色々迷惑かけるけどよろしく」

ミドリは、初めてニツコリと笑った。春風が吹いたかのようなさわやかな笑顔だった。

その数時間前、校長室を出た途端、マリア、ベルタ、ミドリは爆笑した。

「ああ、シヨーンは、本当に最高ね」

マリアが言う。ほかの二人は笑いがおさまっていない。

「何がですか、全く。先輩たちと一緒にいると、この世の恥辱をすべて味わうことになるのではないかと思いますよ」

「あら、私は辱めようなんて思っていないわよ。いつも冷静沈着なシヨーンが、どんな場面で慌てふためくかを試したいだけよ」

「ほんとに悪趣味ですね」

「私にとってはほめ言葉よ」

そう、僕は帰着時身体検査を受け、その後直属の上司となる宇宙軍大学の校長に帰還を報告し、戦闘の顛末について事情聴取を受けていたのだ。マリアたちが笑っているのは、身体検査時のことである。ミドリは完ぺきな演技をしていた。僕を「お兄ちゃん」と呼び、精神的ショックで退行したかのように振舞っていた。ミドリ

は、僕から離されようとするのと泣き叫び、手をつけられない駄々っ子だった。それがいけなかったのだ。設定を作ったマリアも悪いし、演技を教えたミミもやりすぎたし、ミドリも悪乗りしすぎたのだ。そこにベルタが状況をかきまわす。

そして、こんな事態が起きた。

「このままでは検査できませんので、ヒルガさんも一緒に検査室に入ってくださいます？」

看護師が僕に対して告げる。絶対に離すまいと僕の軍服の袖をぎゅっと握るミドリ。

「ええ？さすがにまずいでしょう」

「お兄ちゃん、私と一緒にいるのやなの？」

純真無垢な瞳。ミミのホログラミング・フィギュアを見ているようだ。

「嫌じゃないけど、大人の男性はここに一緒には入れないんだよ」
ここで言う検査は、機械検査である。つまり、服を脱がなければいけないのだ。下着も。

ミドリは、本当に演技なのか、いたずら心からやっているのか判別がつかなかった。

「いや！いや！いや！」

叫んで腕を振り回す15〜16歳の少女。痛い痛い。看護師さんにも当たってしまった。看護師さんは笑顔？で僕を見る。「つべこべ言わずに、さつさと入れや！このクサレ××野郎が！」と、一言も発していない笑顔？の看護師さんからそんな声が聞こえた。

「はあ…じゃあ行くよ、ミドリ」

「はい」

僕は、とりあえずこの部屋では何も見ないようにしようと覚悟を決めて、検査室（女性用）と書かれたドアの前に立ち、わきにあるボタンを押した。ドアが開きかけた瞬間、聞こえてきた声に僕はまず

いと思い、その場から逃げだそうとした。しかし、それは叶わなかった。後ろからすごい衝撃が来たのだ。看護師の足蹴だった。僕は、つんのめり、たたらを踏んで部屋に入ってしまったのだ、マリアとベルタが待機する待合室に。ちなみに、二人とも全裸だった。後方で閉まるドア。二人と目が合う。頭から血の気が引く。これから訪れる悲劇が頭を過ぎり、美しいとか、男性としての興奮とか、そんなことはこれっぽっちも浮かばなかった。

「あら、覗きなんておイタがすぎますわね」とベルタ。

「ほんとに、もうお嫁にいけないわ。責任を取ってもらわないと。そう言えば、結婚するまで男性に肌をさらしてはいけないっていうのがパパの口癖だったわ」とマリア。

「じゃあ、ちゃんと隠してください。ていうか、そんなことをあのダンディで知的な人が言うわけがない。くそ、キヤーとか言わないところを見ると、こいつら分かってやがったな。相手が全然恥ずかしくなくていいところ。血の気の引いた頭に再び血が上る。僕は思わず後ろを向いた。そこには、着換え始めるミドリがいた。

「何で、脱ぎ始めてはるんですかー！」

僕は、へんな丁寧語で絶叫した。

その後のことはご想像にお任せする。彼女らは責任と称して、もうお婿にいけないようなことを強要したのだとだけ僕は言い残しておきたい。

検査室では主に僕の貞操の危機があったが、事情聴取は特に問題なかった。

軽戦闘艦のレコードを設定に合うように変えたのだ。ちょうど僕らがミドリの艦を砲撃した辺りからである。もちろん、ばれれば軍刑務所行きだろうが、ミミに改ざん跡が残らないようチェックもしてもらったので、専門家であっても見破られない自信がある。これも大義のためと自分に言い訳した。僕らが報告するときには、そのデータが既に校長の手元にあるはずだ。

マリアから報告がなされる。僕は時折まことしやかにうなずき、オペレータとして補足すべきところを補足する。僕の隣にはミドリが座っているというか、僕の右手で遊んでいる。ミドリさん、手のひらを爪でひつかくのはやめて。冷静に報告しているところで、高い声とか出ちゃうから。

ミドリが同席したことで、ミドリ救出エピソードも、具体的事実として校長には映った様子だった。そして、校長は僕に対して「できる限りのことをしてあげなさい」と言った。確かに、僕が校長の立場でも、退行してしまうほどに精神的に不安定な少女に同情を寄せるだろう。そんな人間的できた校長の良心を利用した鬼畜がいる。

「私が無理を言って、今回の実習にヒルガくんを連れて行ってしまったんです。オペレーターとして適切な人材がいなかったのだ。ただ、ヒルガくんがいなければ、今回のミッションは達成することができませんでした。彼の優秀な情報処理があったからこそとれた作戦だったと考えます。しかし、無重力下での身体能力に長けたヒルガくんはこの子の救出をお願いしてしまいました。この事態は私の責任です。」

殊勝に反省の弁を述べるマリア。

「君もずいぶん成長したようだね」
騙される人の良い校長。

「今、この子をヒルガくんから離せば、この子はどうなってしまっ

のか心配ですわ。」

追い打ちをかけるベルタ。

「しかし、退行しているとはいえ、15〜16歳の少女をヒルガくんの部屋に住まわせるわけにはまいりません。」

マリアが続く。

「そうだねえ。一時的にどこかで一緒に暮らせるところがあればいいねえ。ヒルガくんもそう思うよねえ」

このおじいちゃんは、どこまで人が良いのか。一線を退いたとはいえ、軍人なのに。僕が間違いを起こす危険性があることさえ想像の範囲外だとは。もちろん、僕は間違いなんか起こさないけどね！

「ええ、少なくとも責任は果たさないと思っております」

僕は無難な答えを選ぶ。

「あ、そうだ！良い方法がありましたわ。校長の許可さえいただければ」

マリアは、とんでもない提案をしたのだ。大学とは言え、軍学校で受け入れられるはずもなかった。

「それはいい。すぐに許可を出そう」

しかし、その、軍大学校校舎近くにあるマリアの父の第2官舎に、僕とミドリ、そして二人の監視役としてマリアとベルタが住むという提案はあっさりと受け入れられた。ふと横のミドリを見ると、黒いはずのその瞳が緑色に光っていた。

僕は、寮から持ってきた荷物を開封しながらミドリに尋ねた。

「ミドリ、さつき校長に対して何かしたんだろう」

「ああ、あの老人の同情心を前面に出し思考を鈍らせたただけ」

「ミドリたちは、具体的な思考に干渉できるのか？」

「いや、原理はショーンのAI、名前はミミか。ミミが私の艦隊を

乗っ取った方法と同じだ。」

「ミドリに同情したときの電磁パルスを読み取って、それと同質のパルスを放って共鳴させたということか」

「そうだ。しかし、シヨーンは応用力があるな」

「これでも研究者志望なんでね」

「ほう、シヨーンは指揮官志望ではないのか」

「ああ。何度も言うけど、作戦立案は僕的能力じゃなくてミミの能力なんだよ」

「しかし、作戦を立案させ、取捨選択し、修正を加えるのは将の仕事だ。将は決定者だ。だからこそ、様々なデータを読み取り、即時に解釈する能力がいる。やはり、シヨーンは、指揮官の方が向いているような気がするがな」

「まあ、こういう事態になったからには、何でもやるつもりだけだね」

ミミが戦場で見せた情報処理能力の著しい向上を目の当たりにし、そして何よりミミが嬉々として戦いに臨む姿を見せたことで、僕は、ミミの能力を発揮させてあげたいという気持ちになっていたのだ。

荷物の片づけをしながら二人で雑談していると、玄関のドアが開く。マリアとベルタだ。

「あら、二人とも仲良いですわね」

ベルタが煽る。

「シヨーン、ロリコンでシスコンだという噂を流されたくないですよ？」

あの看護師の数倍怖い笑顔でマリアが言った。僕は何度もうなずいた。

マリアはすぐに怖い笑顔を、全てをいつくしむような微笑みに戻

した。そして、ベルタ、僕、ミドリをそれぞれ見てマリアは告げた。

「じゃあ、今この場所から私たちの戦いを始めるわよ！」

僕は、そのとき、マリアの笑顔が恒星ヴァレに例えられるのが初めて納得できた。

18・帰還と旅立ち（後書き）

拙いお話を読んでいただきましてありがとうございます。また、評価してくださった方、お気に入り登録をしてくださった方、心より御礼申し上げます。

作者の成長にお力を貸していただけるという方は、よろしければ感想や評価をお願いいたします。

幕間 1 お楽しみと言われて楽しめたことなどなかった

「食事に付き合ってもらうわ」

あのととき、僕が伏兵をミミに乗っ取らせる作戦を許可してもらったときに、交換条件としてマリアが提示したのがこれだった。僕はいつも断りもせず食堂の僕の前の席を陣取り、友人が僕の前で食べていると、穴が開くんじゃないかというくらいの鋭い眼光で友人を睨みつけ、友人がそそくさと立ち去ると、何もなかったようにそこに座るようなマリアが、食事に付き合ってもらうと態々明言した意味を僕は深く考えていなかった。

僕は、よく鈍感などと言われる。女性の気持ちに疎いのは確かではあるが、マリアが女性として僕にアプローチしてきているのはさすがに気付いている。半分は僕をからかう気持ちがあるのだろうけど、それも彼女の「お気に入り」に対する愛情表現なのだろうと思う。ただ、物事はそんなに簡単ではないのだ。

宇宙孤児であるということは複雑だ。僕はその複雑さを、諦めて受け入れながら、一つ一つ検討することで思考力が鍛えられてきたのだという自負がある。もちろん、独りでウジウジ考えるより、他者とふれあい、ぶつかりながら問題を乗り越えていく方が精神的には成熟するだろうことも知っている。でも、それに気付いていることと、できるということは全く違うのだ。マリアが僕にアプローチをかければかけるほど、僕の宇宙孤児性みたいなものが強烈に意識される。そのたびに、僕はその痛みから逃げる。逃げてても逃げてても、逃げられないのに。

宇宙で人は長く生きられない。近恒星間航行手段が確立し、星系を単位とする国家が形成され始めてもなお、これが人類のテーマだった。惑星移住世代にとっては、宇宙で生まれた子孫が生き残らなかったことが相当の心的負担となったと思われる、宇宙で子が生まれないようにすべきだとの考えが大半を占めた。これのために、航行者に対する様々な手段が試みられ、中には非人道的なものもあったと言われる。それでも、航行技術が大幅に進歩し、内乱や戦争が宇宙空間に拡大する時代を迎えると、宇宙孤児が生まれるようになった。

宇宙空間に長期滞在することで子をなし、宇宙空間で出産する事例が多数見られるようになったのだ。宇宙孤児の不運は、親がずっと宇宙空間で生活することは心身の健康上不可能であり、宇宙で生まれた子が地上で生きられるようになる技術も未発達なことだった。「親が地上に帰っても、宇宙で生まれた子が幸せに育つ環境を」という親たちの願いが叶って、というよりは、退役軍人会と人権保護団体との極めてまれな共闘により、異例の早さで宇宙孤児保護条約が当時の星系国家間の折衝機関であった惑星連盟において採択された。この2つの相容れない団体が共闘したのには訳がある。宇宙孤児には、2つの大きな特徴があった。一つは、宇宙空間での生活維持能力に長けていること、もう一つが、なぜか目鼻立ちの整った子が多く生まれるということだった。この2つの特徴から、宇宙孤児の人身売買が盛んに行われたのである。退役軍人会にとっては、宇宙孤児が主に軍人の子であるという感情的な問題だけでなく、宇宙空間における大きな戦力として宇宙孤児に期待し、人権保護団体にとっては、奴隷や人身売買は唾棄すべきものだった。

こうして、宇宙孤児には連盟の保護政策が手厚く施されることになった。当然、宇宙孤児は軍人になるもの、商船団で働くものが大

半を占め、連盟の維持発展に大きく貢献した。宇宙孤児が世代を経るごとに、地上で生活できるような支援技術や宇宙孤児自身が里親になる制度などができあがっていった。しかし、長年にわたってタブーだった存在であることに加え、国を持たぬ者である宇宙孤児は、謂われなき差別を受けることが多かった。それは根深く、宇宙孤児は、今も惑星出身者からは有形無形の侮蔑の眼差しを受ける。

僕がリビングでそんな考え事をしていると、2階からマリアが下りてきた。いつもデートと称して僕を荷物持ちに連れていくときのファンクラブの奴らが見たら卒倒するような露出の高い格好ではなく、シックなワンピースを着ていた。何というか、何を着ても似合う人っているよなと感心する。

「清楚な格好もお似合いですね、マリア先輩」

「あら、シヨーンはこういう格好が好きなの？」

「ええ、好きですね。好きといっても僕が着るわけではありませんからね」

「そうね、考えておくわ」

どっちを考えているのだろうか。自分が着ることか、僕に着せることか。

「何を着ても、この人のためにあつらえたものという感じがするんですね、マリア先輩は」

「あ、ありがと。やけに褒めるじゃない。今日は」

「そんなことはありませんよ。それにしても、僕もちゃんとした格好をしろっていうので、スーツを着ましたけど、どこに行くのでしょうか？」

「それは、着いてのお楽しみね」

「はあ、その答えを聞きたびに、よからぬ想像を掻き立てられるよ

うになりましたよ」

「じゃあ、デートに行きましょう。ちなみに今日は、マルチグラス コミュニケー眼鏡も疎通機器も禁止ね」

「…分かりました。」

ミミの機嫌が悪くなりそうだが、仕方ない。今度、ミミの願いを聞くとしよう。

マリアの運転する車でしばらく走る。この街は、軍関係施設が集中している。都会に出るには、地下を走ることになる。しかし、マリアは、地下道の入口には向かわず、そのまま軍施設の中心に車を走らせる。なんかいやな予感がする。マリアもいささか緊張している様子で、今日は口数が少ない。

「着いたわよ」

「ここって」

「ええ、宇宙軍の統合作戦本部ビルよ」

「食事では？」

「そのとおりよ」

「ここで？」

「そう」

「誰と？」

「……父よ」

はい？あなたの父って、参謀総長じゃん！何で僕を連れ来るの？！

「父が、会いたいらしいのよ」

「しばらく会ってないんですか？」

「いや、あなたに、よ」

「ははは…はい？」

もうどうにでもなれという気持ちが乾いた笑いになった。僕は、どうか今日は恥辱を受けませんようにとだけ、恒星ヴァレに祈った。

幕間 1 お楽しみと言われて楽しめたことなどなかった（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

幕間2 戦乙女の揺り籠

駐車場に車を滑り込ませると、憲兵と思われる兵士が入口に立っている。マリアと二、三言葉を交わすと、道を開けた。車は、一般駐車スペースではなく、地下に下りていく。

「今日は、VIP用から入る必要があるらしいわね」

「先輩は、いつもではないんですか？」

「こんなところに頻繁に来ないわ。ここに来たのは2回目よ。その時は一般入口からだっし。公私混同は趣味じゃないのよ、私も父もね」

「はあ。そんな人が、わざわざVIP用から来いということは、何かを警戒しているんですかね」

「マスコミでしょ」

「マスコミ？ スキャンダルを狙われてるんですか、先輩」

「何を言っているのよ。狙われてるのは、あなたよ」

呆れたような口調でマリアが言う。

「はい??」

なぜ僕が狙われないといけないのか。僕のプライベートを覗き見て喜ぶ奴なんか、いるわけないだろう。

「あなたのそういうところ、つまり、自己評価を気にしないところは、長所でもあるけど、時に短所でもあるわね」

「それは、そうでなんしょうけど。本当に、僕には覚えがないのですが」

「…まあ、じきに分かるわよ」

僕らが駐車場に入ると、後方のシャッターが閉まる。駐車場には、高級車の展示場かというほどたくさん的高级車が駐車されている。ナンバーも、特殊ナンバーが多い。強面の運転手が車内待機してい

る車も多い。さすが、VIP用駐車場ということか。

エレベーターで最上階近くに上がる。おそらく、一般のエレベーターからは、行けないようになってる階なのだろう。あつという間に到着するのに、ほとんどストレスを感じない。惑星出身者には違うかもしれないが。

扉が開いた。そこには、ストレートの長い黒髪、目鼻立ちのはつきりした美人が立っていた。宇宙孤児に独特の黒目だ。くすんだ紅色のスーツを着ていて、背は低いが maria に負けないくらいのプロポーションと一目でわかる。年齢は、30代前半といったところか。参謀総長の秘書なのだろうか？

「ようこそ、若き英雄さん。そして、久しぶりね、私の maria」

穏やかな微笑みを浮かべて僕に告げ、そして maria に告げる。私の？

「久しぶり。元気そうで安心したわ、ママ」

僕は「ママ?!」と声を上げそうになるのを辛うじてこらえ、差し出された手を握る。

「あ、初めまして。私は、シヨーン・ヒルガと申します。宇宙大学校工廠科の3年生です」

「初めまして。ソフィア・フォーゲルトです。惑星連盟評議会議員よ」

「そして、私の母親よ」

maria が付け加える。

「娘が迷惑をかけていて、ごめんなさいね」

「はい! あ、いえ、先輩には様々お世話になっておりまして」

爆笑するソフィア。笑い声は、maria に似ているかもしれない。

「maria、あなたやっぱり迷惑をかけているのね。シヨーン君、ごめんなさいね、この子まだまだ人に対して不器用なところがあるから。悪気はないのよ。」

「いえ。とんでもない」

「悪気はない」のところ、反論した形になる。考えてみれば、案外間違っているのかもしれない。

「もう、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。パパの時間がなくなるわよ」

「そうだったわね。案内するわ」

ソフィアとマリアの会話を聞き流しながら、二人の後ろを歩く。マリアの父母は離婚しているのではなかったか？一緒に会食？一体何のために？自宅でないのはどうして？僕が呼ばれた理由は？考えても分からない疑問が浮かぶ。僕は、思考を放棄する。理由はすぐに分かるだろう。

部屋の前につく。ソフィアはノックもせず、扉を開けた。奥に座っているのが参謀総長クリスティアン・カルマンだろう。ん？なんかすごい威かな格好をしている。式典服？ソフィアがツカツカと足早に歩み寄り、ちょうど立とうとしたカルマンを無理やり立たせ、奥の扉へ押しやり、自分も入って行った。かすかに声が聞こえる。「だって、娘が男を連れ……」「いいから着換えなさい」「でも……」何かを叩いた音。

「ごめんなさいね。少し待っていてもらえる？マリア、お茶をお出してね」

ソフィアが顔だけを出して言い、また扉が閉まった。マリアをみると、肩をすくめた。ご覧のとおりよということか。

待つこと10分。ようやく、カルマンが出てくる。今度は、スーツに身を包んでいる。線は細いが長身によく似合う。軍人ではなくどこかの大学教授といわれる方が似合っている。でも、よく見ると目尻に涙を浮かべている。ちょうど緊張がほぐれる。

「ようこそ。シヨーン・ヒルガくん」

カルマンは、少しづつが悪そうな笑顔で手を差し出す。

「いえ、お招きいただきありがとうございます。参謀総長」
両手で手を握り返し、挨拶をする。

「お見苦しいところを見せちゃったわね」とソフィア。

「いえ、仲睦まじいとはこのことを言うんだと思いました」

「なかなか、本質を穿ってるな」とカルマン。

ソフィアがカルマンを睨み、カルマンはシュンとなる。参謀総長のイメージが、父親の威厳が、崩れていく。同情の気持ちが生まれてくる。

「パパ、時間無いんでしょう」とマリア。

「ああ、さっそく食事をしながら話をしよう」

カルマンが気を取り直して言った。

出された食事はスタンダードなものだった。特に作法を気にする必要がない。しかし、カルマンはパンの屑をぼろぼろこぼしたり、ステーキが切れにくかったらしく、ソースを飛ばしたりと、まるで子どものようにソフィアに世話をされていた。マリアはそのたびに肩をすくめる。

食事の間は、世間話やマリアの生活ぶりについての話題が中心だった。僕には昔の記憶になっているが、家族の会話というのはこういうものだったような気がする。僕は、後から文句を言われないように、マリアをほめたたえておいた。帰った後どつと疲れるような気がする。食事が一段落し、コーヒーが出される。

そして、カルマンはおもむろに話を切り出した。

「ヒルガくん。申し訳ないが、君には我が軍の英雄になってもらわ

ねばならない」
本当に申し訳なさそうに僕に告げた。

幕間 2 戦乙女の揺り籠（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

幕間3 良將の器

カルマンは、その一言を言ったきり押し黙った。

あれ？僕が何か反応しないといけないのか？

カルマンを見ると、もう役割を終えたような顔をしている。

「あなた、それだけじゃ何も分からないわ。いつも言ってるでしょう。言葉を尽さないと理解してもらえないって。」

「パパは相変わらず、伝えるのが下手よね。キース副参謀長の苦労がしのばれるわ」

妻と娘からさんざんに言われるカルマン。何かすごくかわいそうに思えてくる。

「参謀総長がおっしゃる英雄の意味と、申し訳ないとおっしゃった意味を教えてくださいませんか？」

思わず助け船を出してしまう僕。

「ああ。今回の事件では、我が軍に少なからぬ犠牲が出てしまった。艦隊戦の経験豊富なフォーツバニア少将を当てたにもかかわらず。」

「なるほど、負け戦による世論の非難を逸らすために英雄が必要だとおっしゃりたいわけですね」

「まさにそのとおりだ」

人懐っこい笑顔を浮かべるカルマン。ずいぶんイメージと違う。

「失礼ながら、参謀総長。負け戦と言っても二倍の敵の奇襲を受けながら、艦艇損傷率が三割弱で済んだと聞いています。それであれば、犠牲を最小限にとどめたフォーツバニア少将の指揮能力の高さをアピールすれば足りるのではないでしょう。帰還した兵たちの証言も得られるでしょう」

「ああ、確かにそうなんだが、今回はそうもいかなくてね」

「はあ。問題はどの辺にあるのでしょうか？」

カルマンは、助けを求めるようにソフィアを見る。

「シヨーン君。今回の敗戦だけど、敵は何と呼ばれていたか知ってるわよね？」

ソフィアが代わって問いかける。

「はい。『宇宙海賊』ですね。…ああ、なるほど。ネーミングが先行したせいで、話がややこしくなっているということですね。」

『宇宙海賊』と想像していたら、相当に連度の高い艦隊を持った敵でしたというのが事実だが、事実を知らなければ、正規軍が海賊ごときに負けたということになるわけだ。いくらフォーツバニア少将の指揮能力の高さをアピールしても下位の敵に負けたのであれば役に立たない。じゃあ、外敵だったと公表すればいいのかというと、敵の正体は全く不明の現状である。それはそれで、なかなか微妙な問題となる。

「そのとおりよ。でも、負け戦の中で二つだけ明るいニュースがあった」

「商船団の帰還と人質の救出ですね」

ソフィアは微笑む。

「それに、明日にはフォーツバニア艦隊も帰還するわ。軍に関する報道は一定程度は統制できるけど、悪い情報ほど漏れる。マスコミはもうある程度情報をキャッチしているはずだし、負け戦を隠し通すことはできない。情報を無理やり統制してゆがんだ形で情報が漏れて、微妙な問題を引き起こす最悪の情報まで漏れてしまうなら本末転倒でしょ。だから、マスコミには十分に情報を流す必要があるの。」

「なるほど。慧眼だと考えます。今回の場合は、＜『宇宙海賊』と呼んでいたものが正体不明の外敵だったということ＞が微妙な問題を引き起こす最悪の情報というわけですね」

「ええ。これについては高度な政治的処理が必要な問題なの。だから、一時的に宇宙軍の実力に疑問を呈されたとしても、宇宙海賊ご

ときに負けたということにしなければならない」

「だからこそ、美談が必要というわけですね。ただ、マリア先輩の方が、マスコミ受けも良いし、美談にふさわしいのでは？」

「もちろん、マリアを中心とした宇宙大学校生チームの活躍という話になるわ。ただ、シヨーン君以外の3人は、もうすぐ任官するからマスコミの標的にならずに済む。でも、あなたはあと1年学生を続けなければいけない。あなたは、身分は軍に所属しているけど、軍人よりもまだ行動の自由がある。だから、マスコミの標的になるのはあなたよ。宇宙孤児の少女を救った秀麗な宇宙孤児。一般受けしそうでしょ」

「はあ、そういうことですか…」

「もちろん、マスコミ対応は軍が全面的に引き受ける。苦情も要望もできるだけ聞きたいと思っている。ただ、マスコミに顔が知られるということは、たいへんなことだ。今後、軍人としての人生に多大な苦勞をかけることになる。しかも…」

カルマンが何を言い淀んだのか、簡単に予測できた。

「…しかも僕は宇宙孤児ですからね」

「ああ、そうだ。軍隊という組織は、人間の醜い部分が投影される。特に嫉妬という奴は、どうにも厄介なものだ。ただでさえ、差別意識の抜けきれない輩が大勢いる中で、君をそいつらの嫉妬の対象にしてしまうことになると思うと申し訳ないのだ。報告を聞いているが、君がいなければおそらく今回娘は帰ってこなかっただろう。恩に報いるどころか、仇で返してしまうことになりかねない」

カルマンは、沈痛な面持ちで語る。僕は、カルマンが軍人にしては珍しい感性の持ち主なのだと素直に感心する。本来、軍の上層部であれば、英雄にしてやるんだからありがたく思えと言ってもいいはずである。この辺りが、この人の指揮官としての魅力なのかもしれないと思った。

「私なんかを心配していただいてありがとうございます。私にでき

ることは、与えられた環境でやることをやるだけです。英雄役がうまく務まるかどうかは自信ありませんので、失望したという苦情がきても知りませんよ」

僕は努めて明るく言った。

今回の実地訓練に参加するまでは、任官後にそんなややこしい事態になれば退役してしっぱを巻いて逃げることもできたのだが、ミドリと関わり、近い将来の脅威を知ってしまった手前そうもいかなくなってしまった。だから、何があっても自分がやるべきことはやらなければいけない。僕はそんな思いを抱くようになっていた。

「君は大人だな。私が君の年齢のときには、そんなことは思いもできなかつたに違いない。…そうだ、現時点で何か望みがあったら言うてくれ。できる限りのことはしたい」

「……では、お二人のお時間をもう少しただけますか？」

「ああ。別に構わないが」

カルマンは、ソフィアを見やり、二人ともうなづく。僕は MARIA に目配せをする。MARIA は意図を察してくれたのか大きく頷いた。

僕は、ひとつ深呼吸をしてこう切り出した。

「参謀総長、フォーゲルト先生、今回の敵の正体をお知りになりましたか？」

幕間3 良将の器（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

幕間4 僕と世界の歴史

「そりゃあ、知れるものなら知りたいね」

カルマンは、とても楽しいことを見つけたような満面の笑顔でこちらを見る。

「知れば、お二人を抜き差しならない立場にたたせてしまうことになりますが、それでも、でしょうか？」

僕はできる限り力を込めて言う。

「…覚悟が必要なわけね。それも相当の」とソフィア。

「ええ、私のようななんの立場もない若造が、そんな重大な秘密を握っているとは考えられないと思います。ただ、私はあのととき現場にいました。商船団が去った後の戦場に。…私もこれを間違った人に伝えると、自分と大切な人たちの身の安全を失います。真実は劇薬と申しますが、これはとびつきりです」

二人は、しばし黙考する。

「娘もそれを共有しているということだな？」

「ええ」

「場合によっては、墓場まで持っていくことになるな」とカルマン。
「それですめばいいけど、たぶんそんな簡単ではなそうね」とソフィア。

「おそらくは。最悪、お二人は僕を始末しないといけなくなります」

ガタツと音がして、横を見るとマリアが立ち上がっていた。僕は、大丈夫との思いを込めて、マリアに笑顔を向ける。マリアが座り直す。

「分かった。聞かせてもらおう」

カルマンはそう言ってうなずく。ソフィアもうなずいた。

「これをご覧ください。あと、ご自分のP A Iの仮想ディスプレイもご用意ください」

僕は、腕に巻いたA I端末を操作する。ミミの視覚記憶を再生した。

「以上が、今回の全貌です。」

僕はそう告げた。再生が終わっても、二人は押し黙っていた。

「……いくつか質問してもいいかい？」

カルマンは、ようやく口を開いた。

「もちろんです」

「まず、その君の能力について教えてくれないか。敵艦隊の乗っ取りにしろ、敵指揮官との交信にしろ、にわかには信じがたいことをしている。今の映像にしたって、同時に膨大な資料が私の仮想ディスプレイには表示されていた。一体、どうなっているんだい？」

「ええ。ただ、私が特別な能力を持っているわけではありません。それらは全て私が特殊なP A Iを持っているということに尽きます。少し説明が長くなりますが、構いませんか？」

カルマンはうなずく。

僕は、自分の出自について話し始めた。ミミのことを語るには、避けられないからだ。

「これをご覧ください」

ディスプレイに文字列が表示される。

V・C・1032 出生

1044 ミレイユE卒業

1050 ミレイユH卒業

同年 ヒルガ夫妻が、事故により死亡

1051 宇宙大学校入学

何の変哲もない僕の経歴だ。

「私の経歴です。IDチップに入力されているものです。これに少し加えます」

V・C・1032? 出生（詳細不明）

1040 ミレイユ星系で漂流中の

所属不明の艦にて発見。

保護される

同年 ヒルガ夫妻により里親申請

1044 ミレイユE卒業

1050 ミレイユH卒業

同年 ヒルガ夫妻が、事故により死亡

1051 宇宙大学校入学

「こんなことがありうるのか？」

「ええ。養父母の話、生前の日記、艦船レコードを照合した結果です。つまり、私は、出生から約8年間、どこでどう暮らしていたのか、どうして宇宙空間を漂流していたのか不明です。そして、実父母の名も、自身の名も分かりません。しかし、宇宙孤児にはこのようなケースもないわけではありません。」

「ああ、確かにそうだが、ここまで不明なのはめったにないだろう」「いえ、このようなケースの場合、その宇宙孤児は社会の闇に消え

てしまうことが多いのでしょう。幸い、私は闇商人などではなく、善良な船乗り夫婦に拾われました。その意味では珍しいケースなのかもしれません。」

「なるほどな。…今でも、宇宙孤児を売買する輩がいるのは事実だろう。続けてくれ。」

「はい。私がヒルガ夫妻に拾われた時、私が乗っていた艦はボロボロで、辛うじて私の生命維持ができていただけの状態だったそうです。ヒルガ夫妻が保護したときから、既に私の腕には、この端末がついていました。しかし、ヒルガ夫妻が、起動しようとしてもこのPAI端末は反応しなかった。ただ、唯一、漂流していた艦から持ち出せたものだからということで、実父母の形見としてヒルガ夫妻は、これをそのままにしました。」

僕の記憶がはつきりするのには、保護された後からである。その以前のことは闇の中に消えている。いや、微かに覚えていることがあるが、しっかりとした像を結ばないのだ。

「そして、10歳の時、私は偶然この端末を起動しました。いや、何度も同じように起動してもそれまでできなかったのが、その日に限って起動したのです。しかし、起動したPAIは『白紙』でした。」

「白紙というのはどういうことなの？」

ソフィアが問いかける。

「何のソフトウェアも入っていないAIだと思ってもらえればいいかと思います。ホログラミング・フィギュアはおるか、何の機能もなかったのです。子どものことですから、起動できただけで嬉しくて、仮想ディスプレイを表示してずっと眺めるのが日課になりました。しかし、しばらく挨拶のように朝に夕に起動していると、『おはよう』とか『おやすみ』を言うと、音と画面の揺れが返ってくるようになりました。最初は間違えかと思いましたが、日増しに音や

画面の揺れが規則性を帯びていきました。遊び代わりに、様々な言葉を試したり、文字を記憶させようとしていたり、子どもながらに様々な実験を試みました。するとAIの方も、少しずつ反応の複雑性を増していきました。」

「まるで赤ん坊を育ててみたいね」とソフィア

「そのとおりだったと思います。私自身もそんな風に感じていて、13歳の時、ソフトウェアを作ってみようと思いました。ホログラミング・フィギュアをどうしても設定しなかったのです。しかし、どうしてもうまくいかない。試行錯誤するうちに、PAI自体のプログラミング言語の問題に行きつきました。」

「13歳で、よくそこまで考えついたわね」

「今から思えば、確かにそうですね、ただ、自分の欠落を埋める試みだったような気がします。過去の欠落を、未知の機械を動かすことで埋め合わせる、そんな執念だったのだと思います」

当時の自分を客観的に評価すれば、このようなことだったのだと僕は思う。もちろん、養父母にはいくら感謝してもしきれない。養父母は全てを与えて、僕を育ててくれた。ただ、それでも心の穴は埋まらなかったのだ。だからこそ、ミミにかかわってきたことで、僕は救われたと思う。少なくとも多感な時期に自棄にならずに済んだのだから。

「それで、結局プログラミング言語はどのようなものだったんだ？」とカルマン。

「移民船ヴァレンシアのAIを組成している言語でした。惑星到着世代は、その言語を使用して居住惑星化を図る機械の電子頭脳を組み上げています。だから、言語自体は、古い文献を漁れば見つかるものでした。幸い、私の起動したAI用のソフトウェアは開発可能だったわけです。私は、まず我々が使う言語を、疎通言語に設定することから始めました。しかし、一から組み上げるプログラミング

はほとんどそれしかやっていません。正確に言えば、それしかする必要がなかったのです。」

「どうということ？」とソフィア。

「PAIをミミと名付けましたが、ミミはいわば自己成長機能が備わっていたのです。本来AIというのは、命令を与えなくても、環境刺激を読み取りそれに自動的に対応するために開発されたものなので、機械が自分で考えて自分で行動することが可能です。しかし、それは、人間が設定した領域に限定されるものです。一方、ミミはそうではありませんでした。自分で積極的に興味の分野を広げ、私と対話しながら、様々なことを学習していきました。…まるで人間のように」

「どういう原理なんだろうな？」とカルマン。

「私も気になって、ミミの組成構造を解析するようになりましたが、AIを扱ってきた者が蓄積してきた論理構造とは、根本的に違っているということしか分からないのが現状です。ただ、構造を解析する中で、ミミには、最初から膨大なデータベースが蓄積されているらしいことが分かってきました。」

「例えば、多数の星系の地理的データとかでしょ？」とマリア。

「そう。でも、それ以外に何のデータベースがあるのかまだ未知の部分があります。ソフトウェアは、今ではミミが自分で開発できるようになっているので、私が開発する必要がないのです。現時点では、生命探査、広範囲策敵、武装の補修、設計、電磁パルス操作など戦艦に内蔵されているAIが持っている機能も備えています。」

「想像できないけど、いわば自立進化型のAIということなのね…」とソフィア。

「ええ、おっしゃるとおりです。しかも、処理速度の早さを実際に測定したことはありませんが、さきほどミミが乗った艦隊の再編成をご覧いただいたとおりで、おそらくフォーツバニア少将を襲った艦隊の運動速度を凌駕すると思います。もちろん数が違います」

ので単純比較はできませんが」
僕はそこで言葉を切る。

カルマンとソフィアは、黙って考え込んでいる。

歴史の転回点を作り上げようとしているのだ。一筋縄ではいかな
いだろう、でも、ここが最初の勝負どころに違いない。

僕はマリアを見た。マリアは、一つうなずいて、私に任せなさい
といういつもの表情を浮かべた。僕はこのときほど、それを頼もし
く思ったことはなかった。

幕間 4 僕と世界の歴史（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございました。

幕間最終話 宇宙艦隊（前書き）

幕間の最終話です。

幕間最終話 宇宙艦隊

カルマンとソフィアは、沈黙を続けていた。

「私も実際に戦場に立ち会った。このまま今の方針で艦隊を強化しても、あと10年で宇宙海賊以上の實力を持つ敵に対抗できるとは思えないわ。外敵に対応するための戦略なんか全くないし、上層部は権力闘争しか考えてない者も多いし、士官には、出身星系間の派閥もあつていざこざがまだまだ絶えない。一般兵士の不満は爆発寸前で、また、いつ内部から反乱が起きてもおかしくない状況。こんな調子では、外敵と戦えるようになるまで1世紀かかるわ。100年かかるものを10年に縮めるとすれば、シヨーンとミドリに力を発揮してもらうしか手段はないと私は思うわ。でも、宇宙艦隊がこんな状態ではそれが困難だということも知ってる。だから、私が道を切り開く。パパが協力してくれなければそれでもいいわ。」

マリアが訴える。カルマンは目をつむってじっと聞いていた。

おもむろに目を開けて、カルマンはマリアを見る。

「我が娘に苦勞をさせたくはなかったのだがな。どうやら私も布石を打つだけでは済まなくなりそうだな」

カルマンはそう言って、ソフィアを見た。

カルマンは、無難な事務屋と陰口をたたかれているが、カルマンの存在がなければ、宇宙艦隊は崩壊していたのではないかと言われるほどの功勞者である。カルマンは、現宇宙艦隊総司令のエルネスト・リシュパンをはじめとする制服組幹部と同じく宇宙艦隊第三世

代と呼ばれる。

宇宙艦隊は、惑星連盟所属の常備軍となった当初は、各地から宇宙空間で戦える艦と人材を寄せ集めただけの存在であり、形だけの軍隊だったと言われる。これを変えたのが、「ライオット・スターズ」と言われた執行部を率いたグリム・クラフトや、白兵戦において伝説的な戦功をあげ、一般兵の訓練法を築き上げた宇宙孤児の英雄ミハイル・アズマなど宇宙艦隊第一世代と呼ばれるカリスマたちである。伝説的なカリスマの華々しい活躍によって宇宙艦隊の地位は向上し、同時に現在の惑星連盟の体制を築くきっかけとなった。

大規模反乱が減少すると、軍人は個人的な活躍の場を失う。そのようにして伝説的なカリスマの時代が過ぎ去ると、技術者の時代が訪れた。彼らは宇宙艦隊を軍組織として整えた。装備の標準化がおこなわれ、規則が明文化され、制度が設けられ、人材育成機関が設立された。彼ら技術者は宇宙艦隊第二世代と呼ばれた。

第一、第二世代によって基礎が築かれた宇宙艦隊だったが、その後、大規模派兵を経験することなく数十年が過ぎた。もちろん、小規模反乱の鎮圧、補給基地の建設、宇宙災害による救援活動、宇宙災害の予防、宇宙空間における治安維持活動など任務はひっきりなしにあり、惑星連盟及びその傘下にある星系国家にとって宇宙艦隊の存在意義は大きなものとなっていた。その一方で、士官に目覚ましい活躍の機会が減り、執行部は官僚化が進んでいった。官僚化に伴い、政界を巻き込んだ軍内部での権力闘争が激化し、士官の腐敗も進行していった。士官と一般兵との反目、対立も目立っていく。この対立をさらに激化させた要因は、一般兵に占める宇宙孤児の多さだった。アズマによって確立された一般兵訓練は、宇宙空間での戦闘や作業を重視するものだった。それゆえ、惑星出身者が宇宙孤児に比べて訓練によって脱落する率が高く、次第に宇宙孤児率が高

まっていたのである。

反乱の芽はあちらこちらで見られた。後方の安全な場所で命令を下し、自らは権力闘争に明け暮れ、私腹を肥やす惑星出身者の軍官僚。現場で危険な任務を担当する宇宙孤児。しかし、一般兵である彼らの待遇は改善されない。きつかけがあれば、暴発は必然だった。そんな時、彼らへの差別をあらわにする事件が起こった。

商船団や輸送船が恒星系間を行きかうようになると、小惑星帯などに半民半官の補給施設ができるようになった。建設を担うのは宇宙艦隊の一般兵であったが、補給基地の建設は、宇宙孤児が担う任務の中でも危険極まりないものと言われていた。当時、辺境に位置したミレイス宙域にも補給施設が建設される計画があった。すでに計画段階で、この宙域には、隕石群の衝突が予想されていた。しかし、戦略的観点から、ここに補給基地を建設しておく必要があったと言われている。宇宙孤児たちは、引つ切り無しに降り注ぐ小隕石を防ぎながら、建設に当たった。今日作ったものが、次の日には隕石によって破損しているような状況の中、当然予定されていた工期は延び延びになっていく。そこに、物資補給という名目で監察官がやってきた。監察官は、宇宙建築工学にも宇宙物理学にも心理学にも精通しておらず、最悪なことに惑星出身組の軍官僚だった。監察官は、工兵の作業を視察して、先入観のままに宇宙孤児のサボタージュだと考えた。これ以上の遅れを許さないとの指示を残して、早々に去った監察官は、現場に重大なことを伝え忘れていた。よりによって接近中の中規模隕石群の進路予想とその対応策だった。この能力の低い軍官僚は、自らの失念が発覚することを恐れ、虚偽の報告をした。そして、その結果、多数の宇宙孤児が犠牲になったのである。これまで惑星連盟は、この種の事件をもみ消してきた。しかし、この「ミレイスの悲劇」はもみ消すことができなかった。アズマの曾孫が犠牲者の中に含まれていたからである。

宇宙孤児の反乱は必至だった。あちこちで一般兵のサボタージュが行われ、上司が命令違反で拘束を命じても、逆に上司が拘束されそつになる事件が各地で起こっていた。あとは、どこかで反乱が起これば、連鎖的に反乱が起き、宇宙艦隊そのものが崩壊しかねない状況にあった。これを防いだのが、宇宙艦隊第三世代と後に呼ばれる改革派だった。改革派の中でも、軍務省事務局付少佐だったカルマンは、奇抜なアイデアで反乱の危機を乗り切った。それは、世論を背景に90歳を超えたアズマを軍務省事務局長代理に迎え、軍改革の旗頭に据えたことである。電光石火のスピードだった。この作戦の実現を、議会側から後押ししたのが、ヴァルター・フォーゲルト評議員。つまり、ソフィアの父だった。

評議会内の軍事委員会ではヴァルターが、軍務省ではカルマンが、軍内部では派閥に属していなかったエルネスト・リシュパンが中心となり、改革が進められた。宇宙孤児の待遇の改善、一般兵からの士官登用の拡大、贈収賄の徹底した取締まり、公益通報制度の創設など宇宙孤児の不満を抑制すると同時に軍官僚の勢力を削ぐ改革を矢継ぎ早に実施した。権力闘争に明け暮れていた海千山千の軍官僚が手も足も出ないほどのスピードだった。アズマのカリスマ性を利用し、アズマ・ドクトリンに基づく改革と印象付け、世論を味方につけたことも多大な効果を発揮した。

カルマンは、反乱が起ることを予測し、ミレイスの悲劇が起る以前から周到な根回しをしていたのである。

「これでも私とエルネストは軍の改革にある程度は成功したのだ。しかし、成功したとはいえ、お前が言ったとおりまだまだ最善の状

況にはなっていない。だから、内部に意識を向けすぎてきたことは否めない。我々が外宇宙に遠征に行くのが遠い未来の話であることを根拠として、外敵など来ないと高を括っていた。そこに、今回の宇宙海賊事件が起こった。外敵の可能性を考えはしたが、結局その可能性を排除したのだ。いずれにせよ、現段階で戦略の方向転換を迫られている。そこに、シヨン君とマリア。そして、宇宙海賊…ではなかった。宇宙に住まう者か、彼らを組み込んで考えよう」「そうね。まだ見ぬ敵とはいっても、私たちの故郷に侵略を許すわけにはいかないわね。私も議会でできることをするわ」「…ありがとうございます」マリアが深々と頭を下げた。

僕は、今後の戦略について、自分の考えをいくつかのポイントに絞ってカルマンに伝えた。いずれ、マリアを中心に軍内に外敵対策の特務集団を作るにせよ、時間が必要だ。人材を見つけることも必要だし、他者が納得できる功績を上げること必要だ。全てはそれからだ。もちろん、参謀総長にはできる限りのバックアップしてもらうが、自分で力が発揮できなければ、何も為し得ないにちがいない。

まずは、英雄を演じ切る必要があるらしい。これまでの生き方と決別できるだろうか、一抹の不安がよぎる。…ふと右手に温かいものが触れる。右手が強く握られた。横を見ると、邪気のない素直な笑顔のマリアがいる。

僕が向かうのは幸い孤独な戦いではない。そう思い直し、僕は右手を握り返した。

幕間最終話 宇宙艦隊（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

もしよろしければ、感想、評価をお寄せください。

A・1 宇宙刑務所へスペース・ジェイル（前書き）

第二章は、幕間から1年半が経過した時点から開始します。その間の出来事は、話が進む中で埋まっていくように進めていきます。

A - 1 ・宇宙刑務所へスペース・ジェイル

シヨーン・ヒルガは、人生最大のピンチに陥っていた。

敵艦隊に囲まれたのでも、敵兵と対峙しているわけでもない。ましてや、ここは宇宙空間ではない。マリアがシヨーンの鈍感さについてに切れて「あなたを殺して私も死ぬ！」と言ってナイフを突き付けられている場面でもない。

そう。シヨーンは、軟禁されていた。

それだけなら、別にどうということはない。ミミを使って脱出することなどたやすい。

問題は、ありとあらゆる装着型端末を奪われていることだ。さすがに、こうされてはミミとの交信は不可能である。しかも、ここはスペース・ジェイル宇宙刑務所である。矯正不可能な犯罪者と政治犯を文字どおり島流しにする場所だ。

シヨーンが矯正不可能な罪を犯したとか、政府転覆を計画したとかそういうことではなかった。畏にはまったのだ。それはもう見事に。シヨーンが、自分の人質としての価値を正確に認識していれば、このような状況は避けられたに違いない。人間の行動傾向はそう簡単に矯正できるものではない。特に、いざというときに、その人の癖というのは現れるものである。

シヨーンは、それを今痛感していた。後悔してもどうしようもないことは分かっている。人間、軟禁されれば来し方を振り返るものだ。そこに無念さがあれば、どうしても後悔してしまう。

ドアがノックされた。

（食事かな？早くないか？）

シヨーンは不思議に思ったが、この部屋には時計もないので、時間的感觉さえ分からなくなっているのかもしれない。

「ご機嫌いかがかな？宇宙孤児の英雄殿」

顔を出したのは、卵型の顔にニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべるガリガリに痩せた男だった。

「よくはないですね。ただ、何もない部屋に閉じ込められていると、人間どんなことを考えるのかを実験できてうれしいですけどね。そういうあなたはご機嫌いかがですか？ミッシェル・オリオールさん」男は、左の口許を釣り上げて笑う。笑い声も不快な男だ。

「ヒツヒツヒ、英雄殿が俺なんかの名前を覚えてくれていて嬉しいね」

ヴァレンシア紀元

オリオールは、V・C・開始以降、史上最悪のテロリストだ。彼のテロによって命を落とした者は億を数えるのではないと言われる。星系外追放処分になった彼は、この宇宙刑務所に収容されていた。

「稀代の大量殺人兵器が私なんかは何の用でしょう？」

「ヒツヒツヒ、リーダーがあんたを呼んでる。英雄に仕事を与えなければいけないんだとさ」

「おとなしく人質になっているだけではダメなんですかね？」

「フハハハ！ヒツヒツヒ。そりゃあダメだ。あんたを呼んでこなきゃ俺が殺される」

「それは良い！と私が思っただけ抵抗したら、どうなるんです？」

オリオールは、笑いをやめてイカれた目をシヨーンに向けた。

「ここの管理人どもに、一人ひとり違うやり方で死んでもらうことになるさ」

「それはまずいですね……分かりました。案内願います」

シヨーンは、オリオールと話しながら打開策を考えていたが、取りあえずリーダーに会うことが先決だと考えた。情報を得なければ、対応策も考えられない。オリオールを殴って逃げることはできるが、それではこの件は片付かないだろう。いずれにせよ、現時点では手持ちのカードが少なすぎた。

シヨーンは、オリオールについて部屋を出た。この部屋に入ってから1日半が経過していた。

A - 1 宇宙刑務所へスペース・ジェイル (後書き)

拙いお話を読んでいただきまして、ありがとうございます。

B - 1・戦乙女の迷い

マリアは、迷っていた。

これまでの人生で、こんなに迷ったことはないというくらいに。

ショーンが、惑星出身者との恋愛・結婚について、子を為して、その子を不運な目にあわせることへの抵抗感を語ったときでさえこのような動揺はしなかった。もちろん、そのときも金槌で頭を殴られたような相当なショックを受けたが、ショーンへの思いに迷いは生じなかった。むしろ、この困難をどう乗り越えてくれようかと密かに闘志を燃やすこととなった。ショーンはもちろん、そんなことに気づかなかっただろうが。

マリアは、元部下の反乱を鎮圧する役目を担って戦場に向かっていた。その最中、マリアは驚愕すべき事実を知ったのである。

マリアは少尉に任官後、半年の研修を経て、辺境と呼ばれるマジエッタ星系に赴任していた。

惑星連盟で辺境というのは、植民の最前線の意味でもある。マジエッタ星系には、恒星マジエッタの第2、第3惑星がハビタブルゾーンにあり、それぞれ居住惑星化がなされ、植民が進んでいた。植民は一大事業である。近隣星系が国家を上げて植民惑星の開発に臨む。開発に成功すれば、経済効果の大きさは莫大なのだ。当然、金が絡めば問題も起きる。武力衝突から脱法行為まで様々な困難や悪事がそこには介入する余地がある。

惑星上での問題は、その当事者が所属する星系国家の管轄であり、惑星上で異なる星系出身者同士の武力衝突が起きた場合には、まずは星系国家間の外交問題となる。しかし、一步宇宙空間に出れば、違法行為の取締まりはマリアが所属するマジエッタ方面分艦隊の管轄だった。

マリアが、与えられた仕事は広範で、軍隊と宙域警備と警察と税関を足して1で割ったような仕事である。つまり、最前線で起こるすべてのことに対応するのが仕事なのだ。マリアのもとには、200人の一般兵が配属されていた。この200名で、第二惑星メルビルの開発に伴う宇宙空間での問題に対処している。

マリアは、ここに赴任する際、一抹の不安があった。それは、自分のやり方が部下に通じるとの不安である。通常、少尉は任官後数年後には、別の任地に転任する。その間、問題がなければ転任に伴い、中尉に昇格する。ましてや、部下は、宇宙孤児が大半を占め、宇宙空間での技術はヒヨつ子少尉にかなうはずはない。だから、最初の赴任地では、問題を穩便に収め、無難にやるとというのが職業軍人の処世術だった。

当然、マリアには無難に過ごそうとの考えは毛頭なかった。マリアにとって、仕事は全力を打ち込むものであり、少尉だからとか、辺境だからとか、そんな言い訳を自らに許すことはありえなかった。マリアの不安は、普通の少尉とは考えが違つことを認識しており、そのうえで意味ある成果を残さねばならないとのプレッシャーゆえに、起こるものでもあった。

結果的にいえば、マリアの不安は杞憂に終わった。マリアの事務処理能力、折衝能力のの高さを背景に、部下に大きな権限を与え、

マリアは要望や問題について積極的解決に徹したのである。

マリアは着任直後、補佐の軍曹たちを集めて最初の指示を出した。

「私は経験も足りないし、現場においてあなたがたが持っているほどの能力もない。実務はすべてあなた方に任せる。しかし、私は印鑑をつくだけの軍人ではない。事務処理と折衝が私の仕事だ。だから、あなた方に要望があればどんなに小さなことでも上げてほしい。問題案件についても相談してほしい。」

指示は簡潔だった。これが補佐の軍曹たちに好印象だった。これまでの腰かけの少尉は、上との折衝を避けたいがために、要望をのみ消すような輩が多かったのである。そして、実際に、仕事が回り始めると、マリアの能力の高さが遺憾なく発揮されていた。要望は次々と実現され、発想の転換による工夫も多岐にわたった。加えて、マリア自ら、一般兵のもとに動き、話し、不満を聞くというところまで日常的にやってのけた。着任3カ月で、部下の士気が異なってきた。宇宙孤児の英雄であるショーン・ヒルガが、マリアの長所をインタビューで美辞麗句に包んで上げ連ねたことも影響したのかもしれない。名実ともに「マリアの中隊」と呼べる状態になっていた。

そんな折、ある問題案件が持ち上がったのである。

B - 1・戦乙女の迷い（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございました。

A - 2・謎が全く解けない

シヨーンは考えていた。

彼ら特別犯罪者が、なぜ集団を作ることができているのかを。

宇宙刑務所は、コンセプトが明確である。それは社会との完全なる隔絶、その一点である。

外宇宙への移住を人類が決めた時、当然、犯罪をどう扱うかが大きな問題となった。地球世代において脳電磁科学と行動科学の発展により、矯正不可能な犯罪者の範囲はずいぶんと狭められ、自由刑（いわゆる自由を制限する刑罰）よりも人格刑（矯正プログラムによつて人格を変化、あるいは制限する刑罰）への移行が既になされていたという。

特に、外宇宙への移住に際しては、罪を犯したからと言って死をもつて購うことは、限られた人的資源という観点から不経済であると考えられた。ゆえに、「徹底した矯正」に重きを置かれることとなった。もちろん、犯罪の原因を除去したからと言って、被害感情がなくなるわけではない。特に個人に対する罪は、応報感情が極めて強い。それでも、惑星移住に成功した後でも人格刑が支持されているのは、同一人による再犯がほとんどになるという予防効果とプログラムの強度によつては人間らしさ自体を失ってしまうという副作用による補償効果がある故だろう。もちろん、矯正プログラム自体が非人道的であるという議論は未だに存在するが。

そのような人格破壊に近い矯正プログラムによっても、矯正可能な犯罪者がごく稀に存在する。彼らに対して、死刑しかないという議論は今でもある。しかし、それが議論されるたびに、誰が執行するのかという問題が持ち上がる。一度死神の鎌を手放してしまった人類がそれを再び手にするのは、思ったよりも抵抗感が強かったのだ。経済的側面から考えれば、執行する側のリスクとその補償という問題があり、執行を機械によって自動化する方法も考えられたが、人間としての最低限の尊厳に抵触することにも抵抗感が強かった。そして、妥協案として考えられたのが究極の自由刑としての追放だった。

当時の惑星連盟の刑事政策委員がこんな台詞を残している。

「積極的に殺すのはご免だが、彼らが死ぬのは勝手だ」

こうして宇宙刑務所という小さな惑星くらいある巨大な人工構造物が、統計上、この先100年間は、1万人を超えることがないと予測される極少数の犯罪者のために用意された。現在の収容人員は937人である。手術によって上腕部と鎖骨下に埋め込まれたチップにより居場所が常に管理され、「居所」にあるセンサーによっても管理されている。

彼らは、人工構造物上に、それぞれの居所が与えられる。居所では、最低限の衣食住が完備されている。ボタン1つで注文の品が届く。至れり尽くせりである。しかし、彼らが一定期間居所を離れれば、再度居所に戻ってももう要求は聞き届けられない。他人の居所で要求しても同じである。また、自分の居所に他者を入れても、要求は聞き届けられない。

構造物の広さ、制御室による監視により、犯罪者同士が会うつこ

とは計算上不可能であり、よしんば出会うことができたとしても、後は仲良く死を待つのみだ。つまり、惑星社会からだけでなく、あらゆる社会的関係から隔絶させることが意図されているのだ。

（しかし、彼らはこのシステムを掻い潜って、現に社会集団を形成しているらしい。この謎を解かない限りは、根本的な解決にならないだろう）

シヨーンはそんな予測を立てた。

宇宙刑務所を制御する機能は、惑星で言えば核にあたる部分にある。ここに管理者として、特別刑務官が100人余り配属されている。通常の犯罪であれば、刑罰の執行は各星系国家に任されている。ただ、この宇宙刑務所のみが宇宙連盟の所管であり、各星系国家から持ち回りで3年の任期で刑務官を派遣させている。

オリオールについて、地下を下りていく。迷宮のように作られているのは、侵入者対策だろう。

「リーダーってのは、どんな人なのでしょう？」

シヨーンはオリオールと話したくなかったが、情報収集のために口を開く。

「ヘッへ、偉大なお人さ」

「あんたみたいな殺人兵器を従えているんだから、そうなのかもしれないですね」

「ヒツヒツヒ、そのとおりさ。さすがは英雄様だな、我らのリーダーは、俺たちを地獄の淵から救ってくださったんだ。人殺しに狂った俺でさえ、ここでは自殺するかしないか、毎日考えてたんだ。そ

んなとき、我らがリーダーは颯爽と現れてくださった」

「…なるほど。力で従えられているわけではないようですね」

「フハッ、いや、俺なんか何で勝負しても絶対に勝てねえって思ってるよ」

「はあ、そうですか。すごい人なんですねぇ」

オリオールは笑いが止まらなくなった様子だった。シヨーンは、ますますわけが分からなくなった。オリオールが狂っていることは間違いない。ただ、人間的に狂っているにしても、論理が危うい奴という印象はなかったのだが。

ヒツヒツヒ、と妙なひき笑いをしながらオリオールは迷う様子もなく、最下層を目指していった。やがて、大きなピロティに出た。

「まっすぐ行つた部屋が、リーダーがいらっしゃる部屋だ」

「わかりました。オリオールさんは？」

「俺はここからは、案内できねえんだ。あとはあんた一人で行つてくれ」

「はあ、分かりました。案内ありがとうございました」

「フハハハハ！あんた、ハハ、良いな。フハハハハ！」

オリオールは大笑いしながら、来た道に戻って行った。

どうやら、この先は中央制御室らしい。制御室に彼らのリーダーがいるということは、やはり、宇宙刑務所の機能は犯罪者に乗っ取られているということだろう。

シヨーンは覚悟を決め、中央制御室の扉を開いた。

A - 2・謎が全く解けない（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございました。

B・2・おじいちゃん軍曹の案件

「少尉、失礼します」

中肉中背の男性が、マリアの執務室に現れた。顔の深い皺や髪を覆う雪を見れば、もう初老と言っても良い年代である。しかし、実年齢はまだ40代である。

「ご苦労さま、トレンス上級軍曹」

マリアは立ちあがって敬礼を返し、中隊N02であるアーマンド・トレンスを迎えた。

「実は、ご相談申し上げたいことがございます」

トレンスはゆっくりした口調で述べる。それがまた「おじいちゃんつぽさ」を助長しているのだろう。本人は、新兵が「おじいちゃん」と陰で読んでいても気にしていない様子である。

「じゃあ、そこに掛けてくれる？」

マリアは応接セットへと促す。

「歴代の隊長には報告を申し上げていたのですが、メディット星系所属の大型輸送船のことです」

「ええ。知っているわ。ずいぶん前に薬事条約違反容疑で臨検した輸送船ね。条約違反はあったけど、大したお咎めはなかった件よね？」

トレンスは細い目を見開いた。見開いても皺が邪魔をしてそれほど大きくならなかったが。

「…はい。禁止薬物は見つかりましたが、使用禁止になった排卵抑制剤を積んだままにしていたということで、メディットでの裁判で船長とその輸送船の所属会社に罰金命令が出ただけでした」

宇宙で子を為さないようにしていた歴史の名残。そのように処理されたのだ。

「ええ。それで？」

「我々は、あるとき洩る当時の隊長を説得しました。あの輸送船は、人身売買に利用されているのではないかと疑っていたからです」

「しかし、少なくともその証拠は見つからず、挙げられたのは禁止薬物の積載だけだったというわけね」

「はい。しかし、あの船は、いわゆる……」

トレンスは言い淀む。

「いわゆる『風俗船』と言いたいんでしょう？」

「……はい」

「しかも、宇宙孤児の女性に風俗業務をさせ、子を為させ、生まれた子を奴隷として取引する違法商売をしている疑いが高い。違うかしら？」

「……おっしゃる通りです。しかし、どうして少尉がそこまで」

「ちゃんと仕事してれば分かるわよ、それくらい。部下が疑惑の目で見ていた案件だもの」

マリアは微笑んだ後、トレンスを見据えて言う。

「でも、実際に証拠をつかむのは困難よ。おそらくメディット政府の高官が関わっているんじゃないかしら」

「……それでも、見逃すわけにはいきません！」

トレンスは、珍しく語気を強めた。

「もちろんそのつもりよ。それで、何か妙案はあるのかしら？」

「それは……残念ながら。それで、こうしてお知恵をいただきに参ったわけです」

マリアは立ち上がって席に戻り、コンソールを操作する。

「これは？」

「よく見なさい。」

仮想ディスプレイに映っているのは、ID情報の羅列である。

「二つを見比べてみて、違和感はない？」

「あの船の乗船名簿ですね…違和感…」

トレンスは、つぶやく。

「あ！船員名簿に」

「…気づいたかしら？」

マリアが操作すると、船員名簿のある部分が拡大される。

「女性船員のうち三人、男性船員のうち一人に違和感があるわ。3年前と現在で、IDナンバーも名前も出身地も同じなのに年齢に變化がない船員がいる」

「確かに。しかし…」

「ええ、記載間違いはよくあること。でも、薬事条約違反の前例があるから、臨検捜査は可能よ」

「少尉…ありがとうございます」

トレンスは立ちあがって深々と頭を下げる。

「頭を上げて頂戴、トレンス上級軍曹。まだ仕事は何も始まってないわ。周到的な準備をお願いするわね」

トレンスは、去りに際して敬礼をする。上級軍曹になって心底から敬意を込めた敬礼をするのは、初めてだったかもしれない。見た目は孫のような世代であるが、そんなことは全く気にならなかった。

この日、マリア中隊の一般兵の噂の中に、「スキップする上級軍曹」という怪談が増えた。

B - 2 ・おじいちゃん軍曹の案件（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

A - 3 ・偶像の小僧

「ようこそ、英雄殿」

ショーンが入室するや、機械の音が響く。正面のモニターには「SOUND ONLY」の文字。リーダーを確かめようと意気揚々と入室したショーンは肩透かしを食らった形になる。

「そんなに驚くことかね？正体をなかなか現さないのは、悪役にたくさんいるだろうに」

「まるで根っからの悪ではなく、悪役を演じているかのような口ぶりですね」

ショーンは、この正体不明の敵に騙されたのは2度目であり、さすがに皮肉も言いたくなる。

「まさにそのとおり。不本意ながら、悪役を演じているのだよ」
皮肉で言ったことが本気で受け止められ、ショーンは一層不愉快な気持ちになった。

ショーンの今回の受難は、ショーンが配属されたメディット方面艦隊に、宇宙刑務所から支援要請が入ったことから始まる。

メディット星系は、惑星連盟の外縁部に位置し、辺境宙域の開発の中心国家であり、植民地を利用した経済新興国となりつつあった。メディット星系と辺境宙域の中間に、惑星連盟と民間企業による半官半民の補給基地ができ、新たに編成された駐留艦隊の下士官としてショーンは配属された。

メディット星系は完全武装の宙域警備隊も擁しており、治安は良好である。したがって、駐留艦隊と言ってもその規模は小さく、通常の分艦隊の半分程度であり、艦隊司令も大佐が当てられている。ただ、艦隊司令と言っても実戦経験はない。というのも、もともとは補給基地を運営する惑星連盟の官僚であり、駐留艦隊が新たに編成される際に、艦隊も運用する必要が生じ、大佐扱いで軍に所属する形になっただけなのである。その他の士官の大半も同じように官僚出身の腰かけ軍人だった。

配属されたシヨーンの仕事はとにかく雑用だった。艦隊を軍隊として成り立たせるためのありとあらゆる雑用を押しつけられた。着任あいさつでの艦隊司令の言葉は、今でも覚えている。

「君の上司に当たるイワン・バルだ。申し訳ないんだが、私は大佐待遇だが軍のことはからつきしだ。他の者も補給基地の運営の仕事がある。艦隊専属の士官は君だけだ、よろしく頼んだよ」

「よろしく頼んだ」だけで、5,000人以上の命をあずかることになるのだから、命令というのは恐ろしい。ただでさえ新たに編成された艦隊というのは、指揮系統が乱れがちで、動きが鈍く、士気も低い。そんな彼らに艦隊訓練を実施し、弱点を補強し、士気を高める必要がある。普通に考えれば、新米少尉には荷が重すぎる。シヨーンも、ミミがいなければ与えられた仕事の10分の1もこなせなかったに違いない。

シヨーンの自己評価を気にしない癖は、ここでは長所に働いた。シヨーンは、配属時点ですでに有名人だった。個人情報には駄々漏れで、出自はおろか、シヨーン自身が気づいていない歩き方の癖まで皆が知っていた。英雄と言うよりは、アイドルに近かったのかもしれない。シヨーンは、別に軽薄な人間ではないのだが、マスコミ

に消費されるということはそのような印象を与えるということである。

着任後、補佐の上級軍曹たちを集めてブリーフィングを開くことにした。軍歴の長い上級軍曹たちは、この機会に「アイドルの小僧」をこきおろしてやろうと手ぐすねを引いて待っていた。しかし、それは見事に裏切られることになった。

ブリーフィングの10分前、5人の上級軍曹たちは会議室に向かった。「アイドルの小僧」を待ちかまえてやるつもりで。会議室に入ると、そこにはすでにショーンが隙のない敬礼をして待っていた。

「初めまして、歴戦の勇者のみなさん！ショーン・ヒルガと申します！このたび、少尉として任官しました。どうぞよろしくお願いいたします！」

軍曹たちは、声の大きさに圧倒され、とっさに敬礼を返せたのは2、3人だけだった。ショーンはそれを気にするそぶりもなく、皆に席を勧めた。

「では、ブリーフィングを始めます」

「少尉、すみません。我々の自己紹介がまだ」

「皆さん方は、相互にお名前と所属はご存知ですか？」

「ええ」

「なら、自己紹介の必要はありません」

「でも……」

「ご不満ですか？キース・エヴァーツ上級軍曹。経歴も披露しますか？」

「いえ、結構です。了解いたしました」

「ご不快に思われたら、謝罪します。とにかく、儀礼的な時間も

つたいたないと思いますので」

シヨーンが軍曹たちを見回すと、展開の速さに驚いている様子だが、少なくとも不満顔はいなかった。

「では、今私どもの艦隊が置かれている現状からお話ししましょう。」

シヨーンは、手早く艦隊の現状について説明した。すると、上級軍曹の中では若手のツエザーリ・ケンジットが手を上げた。

「少尉殿が張り切るのとは分かりますが、この艦隊で軍曹集めてそんな話しても無駄ではないでしょうか？」

「なるほど…無駄と考える根拠は何でしょうか？ツエザーリ・ケンジット上級軍曹」

「そりゃあ、疲れるじゃないですか。なあ」

ケンジットは他の仲間を見て言う。周りは興味深そうに見るが、明確な賛同者はいなかった。

「じゃあ、ケンジット上級軍曹。ここには、5、000人の兵がいる。誰がその命を預かるんです？」

「…それは、上官でしょう」

「そう、上官です。じゃあ、この艦隊の司令は誰で、どんな経歴の持ち主かは知っていますか？」

「もちろん、知っていますよ。官僚で、しかも建設省かなんかの出身でした。従軍経験は全くない」

「私の言いたいことが今の質問と答えから分かりませんか？」

シヨーンは語気を少し強めて言う。

「……」

ケンジットは目をそらして押し黙る。

「ケンジット上級軍曹なら、命を預かる重みが分かるはずだと思いますが？」

「…失礼しました」

ケンジツトは頭を下げた。

「この会議がこの艦隊の最高意思決定機関だと思ってください。皆さんしか、民を守り、兵を守ることができないのです」

シヨーンが上級軍曹たちを見据えると、彼らは先ほどよりも真剣な目を向ける。

「話を続けましょう。要するに我が艦隊は、寄せ集めのボロボロの軍隊です。それを3カ月で実戦に耐えうる軍隊に仕上げねばなりません」

「3ヶ月ですか?!」

上級軍曹にしては若い女性が驚きの声を上げる。声はかわいらしいが、体格を見れば熊も余裕で素手で倒せそうな雰囲気である。

「ええ。3カ月です。納得いきませんか? レナ・バード上級軍曹」

「いえ、納得の問題ではありません。必要性和実現性の問題です」
体力バカではないことが、発言から分かる。さすがに、その年齢で上級軍曹になれるわけだ。

「いい答えです、バード上級軍曹。まず必要性から行きましょう。

この宙域では、いつ戦闘が起こってもいい状況にあるからです。」

「そんなはずはありません」

落ち着いた雰囲気紳士の紳士が述べる。ダンディな声である。

「あなたがそう考える根拠は何ですか? キット・ロウズ上級軍曹」

「それは…これまで全くそんな兆候はありませんでした」

「確かにこれまで戦闘とは無縁の宙域でした。では、なぜここに駐留艦隊を置く必要があるのか? その点はどう考えますか?」

「補給基地の確保のためではないでしょうか?」

「そのとおりです。では、補給基地が確保できない状況に誰がするんです?」

「……」

ロウズは考え込んだ。

「仮想敵が存在するということですか?」

最後まで黙っていたジリー・ミルトンが質問する。黒人系統の肌に

メガネをかけた女性である。年齢は40代、珍しく結婚している女性軍曹である。ちなみに、夫は20代の新兵だ。

「そうです。この宙域で、我々に勝る武力を持っているところがあるでしょう?」

「メデイトですね」

「そのとおりです、ミルトン上級軍曹。今の執行部は、戦略的に意味のない艦隊は置かないはずです。宇宙海賊に対処する必要もあるわけですから。仮想敵が本当の敵にならないためにも、早急に連度を高める必要があるわけです。ここまではよろしいですか?」

上級軍曹たちは、それぞれ頷いた。

「では、実現性の問題です。これを見てください」

シヨーンがコンソールを操作すると、ディスプレイに訓練スケジュールが表示された。

「おそらく過酷なスケジュールになるはずですよ。歴戦の勇者であるあなた方なら、可能と思います。力を貸していただけますか?」

シヨーンは、マスコミ対応で覚えた、優しい笑顔を上級軍曹たちに向けた。上級軍曹たちは、その笑顔をマスメディアを通して見ていたが、一連のやり取りを終えた後では、その意味が変わっていた。

最も年長者であるエヴァーツは、会議室を出た後こう漏らした。

「震え上がったぞ。あの小僧には」

会議室に入る前とは小僧の意味合いが変わっていたことは言うまでもない。

A - 3 偶像の小僧（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

B・3・おしゃべりは光速を超えて

マリアは、トレンスが辞去すると、自らのP A Iを操作した。

「ミドリ、今大丈夫？」

『…まったく何時だと思っておる』

ミドリの声が聞こえる。

着任に当たって家を離れる際に、ミドリが持っている通信機器を借りたのである。惑星連盟の科学技術ではここまで距離が離れていると、即時通信は無理なのだ。

「ごめんね。ちよつと困ったことがあって、相談したいのよ」

『ほう。そなたが相談とは珍しいのう』

「シヨーンに連絡ができればそうしてるわよ」

『おやすみ』

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ」

『冗談冗談。で、何かな？』

「ミドリ、人間の年齢って見分けられる？」

『ああ、簡単なことだ。遺伝情報さえあれば』

「他の方法はないの？ミドリに送信できるものじゃないと困るじゃない」

『なるほどのう…あ、こういう方法がある』

「何？」

ミドリは驚くべき方法を言う。

「ええ？それって問題じゃない？」

『そなたが口八丁で乗り切れば済む話ではないか。私が解析しなくて済むしな』

「まあ、仕方ないわね。ありがとね、ミドリ」

『よいよい。ただでそなたの父上の家に住まわせてもらっておるし』
「そう言えば、ミドリは惑星連盟の弁護士資格取ったんだって？」

『ああ、資格があれば動きやすいからな。あと、惑星連盟の法制度も勉強できたし、まさに一石二鳥だ』

「まったく、反則でしょ。あんたの力」

『まあ、そう言うな。お主らに協力するときに必要だろう？ 社会的地位というものは』

「確かにそうね。まあ、あんまり無茶しちゃだめよ」

『忠告は聞いておこう。ああ、つい先日、シヨーンと通信をしたが』
「私のこと何か言ってた？」

『話を最後まで聞け。お主は』

「早くシヨーンの話聞かせなさいよ」

『いや、シヨーンはメディット星系に配属になるらしいが、いろいろ問題が山積しているらしい。あと、お主のことを心配しておったぞ』

「メディット星系？」

シヨーンがどこに配属になるかは軍内でも機密事項に該当する。機密性は低いが。

『ああ。しかし、お主らしくないな』

「何が？」

『いや、いつもなら、シヨーンが心配していたと言えば、凄まじい勢いで食いついてくるのにのう』

「私も少し大人になったのよ」

『おやすみ』

「こらー！ おい、宇宙人！ 信じる！」

ミドリは本当に通信を切ったようだ。しかし、シヨーンがメディット星系に配属になるのは僥倖だ。正直、マリアにもこの後の展開がどう転ぶかわからない。宇宙で最も信頼できる人がそこにいるというだけで、不安が晴れる気がした。

マリアは気持ちを切り替え、風俗船撲滅作戦を考えることにした。

結果的に風俗船の摘発は成功した。案の定、名簿の記載間違いの船員をはじめ、船員の多くは18歳未満で、風俗業務を強制されていたことが発覚し、船員の食事に成長抑制剤や成長促進剤、幻覚剤などの違法薬物が混入されていたことも判明した。マリアのち密な作戦とトレンスの手際の良さにより、物証が押収でき、船長及び乗船中の利用者の身柄も拘束できた。その中にはメディット星系の高官も含まれていた。

ちなみに、この臨検捜査をしたその日、宇宙軍広報課を通じて、ある新聞社がマリアに取材をしに来ていた。取材途中に緊急連絡が入り、そして、この大捕物である。当然、マリアが仕組んだことであるが、このスクープは惑星連盟中を駆け巡った。

おそらく、マリアでなければ星系政府高官が関与する事件の摘発はできなかっただろうし、であれば、その後の展開など神ならぬ身で予測などできなかった。だから、この現状、つまり、トレンスが新任地で反乱を起こしたのは、マリアの予見できるところではなかったのである。

B - 3 おしゃべりは光速を超えて（後書き）

拙いお話を読んでいただき、ありがとうございます。

A・4・人はギャップに弱いもの

『お疲れ様でした。マスター』

執務室に戻ると、ミミが話しかけてくる。ミミの声は、子ども独特の高音域がなくなり、落ち着いた雰囲気を感じたように思う。

『ありがとう、ミミ。助かったよ』

『お役に立てて嬉しいです』

ミミのホログラミング・フィギュアが微笑む。惑星連盟の白地に青のラインが入った制服姿である。別にショーンが夜な夜な設定したわけではない。もともとミミは、自分で毎日服装を変えていたが、最近はTPOに合わせて服装を変えるようになり、ショーンが、勤務中に呼び出すときには、この格好だ。

『ミミは、性格・行動分析ができるようになってきたね。あの訓練スケジュールの原案はほんとにびっくりしたよ』

先ほどの会議でも、ミミがあらかじめ上級軍曹それぞれの人となりを分析していなければ、ショーンはオタオタしていただろう。少なくとも、最初の顔合わせでそのような隙を見せれば、今後の艦隊運営に支障をきたしていたはずである。あの訓練スケジュールも、目標達成とそれぞれの能力と特徴とのギリギリのバランスで調整してあるが、ミミが作った原案がなければ、最初の数週間をこの作業に充てざるを得なかったに違いない。

『そうですか？エヘヘ…嬉しいです』

（ああ、素直な娘に育っているなあ。人間ならそろそろ反抗期を心配するころなのかもしれない。）

シヨーンはふと思う。

『そう言えば、ミミ』

『何ですか？マスター』

『最近、少し大人っぽくなったね』

『ほんとですか！嬉しいな』

『ミミも大人っぽく見られるように努力してたのかな？』

『そうなの。マスターが仕事を始めたから、ミミも仕事モードを作りました！』

シヨーンは思わず、微笑む。まだまだ考えが子どもっぽくて安心したのだ。

『仕事モードとプライベートモードがあるの？』

『そうなの。でも、プライベートモードは細分化されているんですよ』

『細分化？』

『はい。娘モードと、ワガママな年下の恋人モードと、あと…』

『ちょ、ちよっと待って』

『何ですか？マスター』

『なんか、こうモードというかキャラクター設定みたいになってない？っていうか、それミミの発想じゃないでしょ？』

『はい。ミドリお姉さまが、女は演じることができなきゃいけないって熱心に…』

（やっぱりか、あの宇宙人め！あいつとの同居は、やっぱりミミの教育上よろしくなかった。帰ったら、絶対に一言もの申してやろう）

もしシヨーンとミミが人間の父娘であれば、過保護も度が過ぎているところである。こんな父娘関係が現実になれば、かえって激し

い反抗期を経験することになるかもしれない。

『でも、ミドリお姉さまからは、たくさん大切なことを教えていただきました。』

『ああ、なんか聞かなくても分かるよ』

『そうですか？でも、マスターを女狐から守る１０８の方法はちゃんと役立ってますよ』

『……ええ！？何？実際になんか僕の知らないところで、力を使っちゃってるわけ？』

『あ、そうだ！ミミ、メンテナンスを思い出しました！じゃあ、また後でね。マスター』

ミミは早口でそう言うと、ホログラミング・フィギュアが消え、通常P A Iモードに移行した。取り残されるシヨーン。

シヨーンは、ミミが都合の悪い話題をごまかしたという余りに人間らしい行為に驚嘆し、それから自分に隠し事をしていたことにショックを覚えた。その姿は、娘の成長が自分の予測以上だったことに愕然とする父親そのものだった。

シヨーンは、上級軍曹及びその部下である軍曹たちと定期的に会議を持ち、現状の共有、対応策の検討を行った。ただ、それ以上に訓練の進行に効果を発揮したのは「シヨーンの徘徊」だった。

シヨーンは、この艦隊に配属される前から、ミミにこの艦隊を取り巻く環境だけでなく、所属する人員についても、ありとあらゆる情報を収集させていた。そして、配属直後には、全ての艦を自分の足で見て回った。それは、主として各艦をミミの観測下に置くため

であつたが、事前の情報収集で良くも悪くも目を引いた者に会うためでもあつた。

シヨーンはこう考えた。――士気を高めるには、カリスマ性のあるリーダーが感動的な演説を一発やればいい。確かにその通りである。では、カリスマ性のないリーダーが士気を高めるにはどうするのか。軍隊は集団であり組織である。個人の能力を集団の力に直結させるためには、地道な地ならし作業をする必要がある。5,000人という数は、軍隊として小集団であるがゆえに、能力や心身の状態が目立って劣る者は底上げをし、目立って優れたものは水路付けをすることが不可欠なのだ――と。

シヨーンはそこを徹底した。訓練の進捗状況を逐一確認し、ミミに分析させ、良くも悪くも目を引く者を探し、軍曹らに命じて対応策を取らせた。そうした上で、シヨーンは、訓練が終わった時間帯に、フラツと艦隊内の各艦を徘徊し、件の目立つ者に自ら声をかけ、雑談したり、食事を共にしたり、時には酒を飲んで騒ぎ、賭けごとをしたりすることあつた。

シヨーンは、自分にはカリスマ性などないと自認していたがゆえに、このような地道な行動になつた。しかし、もともと一般兵の間では、マスメディアの宣伝効果で人気（アイドル的なものであるが）があつた彼である。フラツと現れて、一般兵に気さくに話しかけ、冗談を言い、同じ釜の飯を食う中で、アイドル的な縁遠さとのギャップが受けて、一般兵の間での人気は爆発的に高まっていたのである。もちろん、彼はほとんど意識していなかったが。

こうして、戦時中でもなく、危機感を煽つたわけでもないのに、メディアト方面分艦隊の士気は、高まっていた。士気が高まれば、当然、訓練効果も上がっていく。3カ月経つ頃には、ほぼ目標どお

りの錬度に仕上がっていた。

そこに、彼らの腕を試す絶好の機会が訪れた。

A - 4 ・人はギャップに弱いもの（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございます。

B - 4 ・見えざる敵との戦い

マリアは、今回の出撃命令を受けた時のことを思い出して、怒りが再燃する。今考えれば、よく、目の前の豚、ではなく、豚のような上司を殴りそうになる衝動を見事に抑えたものである。シヨーンがこの場面を目撃していたら、目を擦って確かめたかもしれない。

マリアは、中隊が駐留する第二惑星衛星基地から上司の呼出しに応じるため、マジエッタ星系外縁にある補給基地を訪れていた。

「御苦労、フォーゲルト中尉」

豚のようなマリアが形容したとおり、マリアの直属の上司であるシン・ウェクスラー少佐は、尋常ではない肥え方をしていた。廊下から自らの執務室に入るのさえ苦労するのではないかという巨体である。しかも、脂ぎった中年男性にもかかわらず、声はなぜか甲高い。

マリアは、この上司に対して同じ空気を吸うのも嫌なくらい生理的嫌悪感を持っていた。しかし、マリアはそれを少しも出さず、むしろ微笑みを浮かべてこの豚のような上司に相対していた。マリアにしてみれば嘲笑の笑みなのだが。

「いやはや、困ったことが起きてな。第3惑星ジョイラックのことは知っているか」

「確か、ミカイル・トラバーツ大尉がご担当でしたね。アーマンド・トレンス准尉がそちらに転属した関係で、一度お会いしましたが」

マリアは、ミカイル・トラバーツの嫌味な顔を思い出した。ミカイルは「ライオット・スターズ」の一員だったウィレム・トラバーツ少将を曾祖父に持つ名門の出身である。ことさらにそれを鼻にかけていることが一言も言葉を交わさないうちに立ち居振る舞いから分かってしまい、トレンスの今後の苦勞に同情したことを思い出した。

「そうなのだ。その、トレンス准尉が反乱を起こしたのだ。トラバーツ大尉を人質に、第三惑星の衛星基地に立てこもっておる。」

「…トレンス准尉が？」

マリアには、信じがたいことだった。一瞬耳を疑い、聞き返しかけたが、辛うじてそれを思いとどまった。

「ああ。何を血迷ったかは知らないが、宇宙孤児の待遇改善を求めて籠城しているらしい。まあ、あやつも所詮宇宙孤児だったということだ。親を知らぬ者は、恩も知らないというのは本当らしいな」
ウェクスラーは笑う。甲高い声なので耳に響く。

「……それで証拠はあるのでしょうか？」

マリアは、固めた拳を隠し、努めて冷静にそう質問した。

マリアにとって、宇宙孤児についてバカにするのは、ショーンをバカにするのと同じなのである。そもそもマリアは宇宙孤児に対する差別意識を嫌悪していたが、ショーンと出会ってから、目の前で差別意識をひけらかす奴らに、片端から悪質ないたずらを仕掛け、辱めてきたマリアである。今が雌伏の時と思っていなければ、少佐に深い心の傷を刻むくらいは仕出かしただろう。

「現場から離脱してこちらに帰投した者が3人おる」
ウェクスラーは、そんな危機にあるとは知らずに答える。

名前を聞けば、そのうち2人はトラバーツの直属の部下でマリアも面識がある。もう1人は、面識がないが、どうやら第三惑星でマリアと同じ職務に当たっている少尉らしい。

「少佐、私がここに呼ばれた理由は、その反乱に関係しているということですか？」

「そのとおりだ。君は察しがいいな。マリーベル・フォーゲルト中尉、君には、元部下の反乱を鎮圧してもらいたい」

「…わかりました。ただ、少佐、一つよろしいですか？」

「何かね？」

「私が反乱鎮圧に向かう間、現在の業務はどうすればよろしいかと思ひまして」

「それは、私に任せてもらおう。それに、君はこの間の軍功で中尉に昇進したのだ。どのみち現在の業務を誰かに引き継がねばならん」
「…なるほど。了解いたしました」

マリアは、少し思うところがあったが、ここでこれ以上の議論をしても仕方がないと考えた。

「では、改めて辞令を申し渡す。マリーベル・フォーゲルト中尉、貴官を当方面分艦隊所属憲兵隊特別部隊長に命ずる」
ウェクスラーが、甲高い声で言い渡した。

「…マリーベル・フォーゲルト、拝命いたします。」

マリアは、甲高いウェクスラーの声が緊張によってか一層高くなり、一瞬笑いそうになったが、辛うじてそれをこらえた。

マリアは少佐の部屋を出て、ひとり考えながら廊下を歩く。

今回の事案については、納得のいかない部分が多すぎる。

トレンスはどう考えても、自ら反乱を起こすような人物ではない。マリアがともに仕事をする中で見た限り、部下に対して寛容で「おじいちゃん軍曹」と慕われている。その一方で、悪事に対する強い怒りを持っており、悪に対しては絶対に屈しない、そういう人物である。彼なら、自らの境遇に対する不満が仮にあつたとしても、そんなことはおくびにも出さないだろう。仮に部下が理不尽な処遇を受けたとすれば、ありとあらゆる手段でその部下を守り抜くに違いない。そんな彼が、反乱の首謀者だという。宇宙孤児の待遇改善を訴えるのに、彼が嫌悪する悪事を以てするだろうか？にもかかわらず、彼が首謀者である反乱が実際に起こっているということは、そこには、欠けたピースが存在するはずだ。

そして、反乱の鎮圧にマリアを抜擢したことも引つ掛かる。風俗船の摘発によって、トレンスは昇進を果たし、栄転と言えは聞こえはいいが、長年にわたって指揮してきた部隊を離れざるを得なかった。その影響は大きく、マリアはトレンスの担っていた職務を、他の上級軍曹たちに分担させた上で、事務処理を見直し、人材も抜擢した。しかし、風俗船摘発の事後処理もあり、正直なところ、まだマリアがいなければ回らない状況だ。マリアは、当然そのような状況も詳細に報告している。それにもかかわらず、今回の辞令であるマリアが今現場を抜ければ、第二惑星衛星基地の機能は間違いなくザルになる。

第二惑星衛星基地の機能がザルになって喜ぶのは誰だろうか。メ

ドイツ政府である。マリアは、この事案の背景にメドイツ政府の黒い意図があることを確信していたが、その操り糸の先に誰がぶら下がっているのかについては、まだ自信がなかった。

しかし、マリアは、自分を今回の事案に関与させた「操り人形」に対して、見通しの甘さを噛みたい気持ちになっていた。おそらく「操り人形」は、マリアが反乱の鎮圧に相当な時間を要することを期待しているはずだ。そして、結果はどうあれ、難癖をつけてマリアを左遷しようとの腹づもりだろう。

なるほど、いいわ。そっちがその気なら全面戦争よ。

マリアは、見えざる敵に宣戦布告をすると、颯爽と廊下を歩き去った。

B - 4 ・見えざる敵との戦い（後書き）

拙いお話を読んいただきありがとうございます。

作者の成長にお力を貸していただけの方は、よろしければ、感想・評価をお寄せください。

A - 5 ・ 非常に非情な人選

『マスター』

ミミは、ショーンを呼ぶ。少し緊張した声である。ホログラミング・フィギュアのミミは、栗色の髪を後ろで束ねた、いわゆるポニーテールにしている。先日、ショーンが褒めて以来、好んでこの髪型で登場する。

「どうしたの？ミミ」

『300隻ほどの艦隊がメディット星系からこちらと逆方向に飛び立ちました』

10光年ほど離れた星系での動きは、いくらミミといえども観測できない。ミドリの技術を応用してショーンが設計し、ミミが作り、ベルタが名付けた「スパバイ」の効果である。ちなみに、ネーミングは、「スパイ」と「ブイ」と「スーパ－ブイ」をかけたものだとベルタは自信満々に言っていたが、ベルタのネーミングセンスの悪さは意外だった。もちろん、ショーンは表情にすらそれを出さず、自己保身のために褒めちぎった。

スパバイは、成層圏に浮かぶブイのような観測機器であり、もの自体が小さく、レーダー透過性と超光速通信を備えた超小型スパイ衛星のようなものである。ショーンが着任早々、補給基地に立ち寄ったメディット星系所属の商船の外壁に、相当数のスパバイを成層圏につくと同時に外れてまき散らすようひそかに取り付けたのである。その後も、ショーンはこれを繰り返し、今ではメディット星系の主惑星メディナ・ポリスの成層圏上を無数のスパバイが浮かんでいる。どんな戦であれ情報を制することが重要なのはいつの時代も変わらない、だから、ショーンは褒められることをしているのだが、

シヨーン自身は犯罪すれすれの行為が板についてきた自分にいささか気落ちしていた。こうして重要な情報が得られれば、少しは気が楽になるようだ。

「それは、メディット政府の正規の艦隊かな？」

『どうやら違うようです。宇宙軍のデータベースと照合しても所属先不明と出ます。』

「予測進路はどうなってるかな？」

『メディット星系第5惑星辺りで反時計回り90度方向を目指して大きく弧を描くように進み、星系外で超光速航行に移る予定です。』
スパブイのいくつかがその艦隊に引っ掛かって張り付いたのだろう。そうでなければここまでの情報は得られない。

「ということは、こっちに来る可能性があるね」

『はい。最短でこちらにくると計算した場合には、およそ30時間後に当補給基地が所属不明艦隊の射程圏内に入ります』

「30時間が…あ、そうだ、ミミ？」

『何でしょう？マスター』

「もしかしてメディット星系の宙域警備隊がこっちに向かってたりしない？」

『広域策敵します……完了しました。マスター、ちょうどここから1光日の距離に500隻程度の船団が待機しています』

「やっぱりか…」

『どういふことですか？マスター』

「いや、メディット政府が揺さぶりをかけに来たんだなって思っ
てね。ミミ、所属不明の艦隊がテロリストであることを想定して、最も効率的で効果的な戦術を検討してくれる？」

『はい！マスター』

以前は、一度通常PAIモードに戻って、再度シヨーンを呼び出して
いたミミであるが、最近は、ホログラミング・フィギュアを展

開したままにすることが多い。たいてい、ミミが「ナウ・ローディングの歌」や「ちよつと待つてねの歌」などを歌いながら踊ったりしている。その愛らしさにシヨーンはニヤニヤしたりするのだけどもし誰かが部屋の前で聞き耳を立てていたり、急に上級軍曹の誰かが部屋に入ってきたりすれば、ヤバイ。社会人としての生命を絶たれる事態である。しかし、シヨーンは、まあいいかと思つてそのままにしている。いつの時代もかわいいは正義なのだ。

シヨーンは、ミミの用意したデータと作戦概要をまとめ、バル大佐のもとへ向かった。艦隊のことを任されているとはいえ、少尉に艦隊を動かす権限はない。今回の作戦を実行するためには、艦隊司令官を用意してもらわなければならない。

「失礼します。」

シヨーンがバル大佐の執務室に入ると、バル大佐の机は大量の書類に埋もれていた。シヨーンが着任あいさつに訪れた時も、このような状態だったので、これがデフォルトなのだろう。

「ああ、ヒルガ少尉。御苦勞」

バル大佐は書類にサインをしながら言った。シヨーンを見たのは一瞬である。

「実は、緊急通信にて報告書を上げましたとおり、所属不明の艦隊が当補給基地に接近中です。300隻の艦隊なので、それなりの火力もあると考えます。場合によっては一戦交えざるを得ないかもしれません」

「それは、物騒だな。なんとか穏便にはいかんのかね？ まったく軍人という奴は、すぐに壊したがる。それがどれだけ経済的な損失を

生むか分かっていない」

バルは、ようやくショーンを見て言ったが、発言の後半は完全に独り言になっていき、表情も困った事態であることを現わすかのよう
に眉が下がっている。言つては悪いが、情けない表情である。

「もちろん、経済的損失はできる限り少ないに越したことはありません。最終的には穩便に済ませるにしても、危機管理は必要です。

軍隊は、何もドンパチやるだけが使い方ではありませんので、その
点をお考えいただければ」

官僚には、それを聞けば大人しくなる言葉がある。これは、マリア
の母親から教わったことだ。

「なるほど、危機管理な…分かった。そもそも艦隊の運用は君に任
せてある。最悪の事態を想定して君の立てた作戦を許可するが、で
きる限り穩便に済ませてほしい」

「大佐、その言葉はたいへんありがたいのですが、残念ながら私
には艦隊を指揮する権限がありません。ですので、佐官クラスの方
を司令官に任命していただきたいのです」

「まったく、軍隊という奴は…そうだな…シエーステット君、私
の執務室まで来たまえ」

バル大佐は、ブツブツ文句を言いつつも、受話器をとって誰かを呼
びつけた。

2、3分後、執務室のドアが叩かれた。通常のノックを「コン、
コン」と表現すると、今のノックは「ココン、コ、ドガッ」だった。
ショーンは、3音目は一体何なのだろうかとドアを振り返った。そ
ろっと入ってきた女性を見るや、ショーンは吹き出しそうになっ
た。額にきれいに、それは見事にドアノブの痕がついていた。どう
やったらつくのだろうか？

「し、失礼しま、うきや」

部屋に入るやヒールを踏み外してつんのめる。思わず、シヨーンが支える格好になった。

「あ、ありがとうございます」

小さいが意外にも張りのある凜とした声だった。しかし、感心したのもつかの間、目があった瞬間、シヨーンはこらえきれずブツと吹き出した。鍵穴までくつきり痕の付いた額に目がいったのである。

「失礼しました」

シヨーンは謝る。謝りながらも、笑いが口許に残る。

「人の顔を見て笑うだなんて無礼千万です！」

「いや、本当に失礼しました」

シヨーンは平謝りに徹し、彼女を助け起こす。違和感がある。彼女を立たせたつもりなのに彼女の頭は、シヨーンの顔よりも下にあつたのだ。ヒールが片方脱げたことも災いしたのだろう。

「シェーステッド君、本当に君は落ち着き…ブグツ…ブハハハハ！」書類から顔を上げて、額にドアノブの烙印が押された彼女を見て、一瞬書類に目を戻しかけたが、もう一度彼女を見て、バル大佐は遠慮なく大笑いした。

シヨーンもつられて再び笑いそうになったが、辛うじてこらえた。

「はあ…君は本当に1日1回は面白いドジをするな。」

ひとしきり大笑いした後、バル大佐はとどめの一言を放った。ドアノブの彼女は暗く落ち込む。

「まあいい。それで、シェーステッド君、君は軍の階級では何だ？」

「はい…ええと、少佐だったと思います」

「少佐ですか?!」

シヨーンは素で質問をしてしまう。

「そうですね。あなたは少尉ですね。どうです！上官に向かってさっきの態度はあんまりではありませんか？」

「こら、シェーステッド君、少し黙りたまえ」

「はい……」

シユンとなるドアノブ女。小動物っぽさを感じる。そう言えば髪の色もハムスターぽい。

「彼女は、エレナ・シェーステッド。彼女はこう見えて惑星連盟職員のところそこ古株だね。我が部局の秘書課長をやってもらっている。課長級だから少佐になったということだ」

「ええ。それは分かりました。…大佐、まさか」

「ああ、察しが良いね。そのとおりだ」

シヨーンは血の気が引く。もちろん誰でもいいのだが、この人選はあんまりだろう。司令官にドジっ子（もはや「子」ではないが）は要らない。

「しかし……」

シヨーンは抵抗を試みる。

「30時間後なんだろう？彼女以外にするなら相当時間がかかるよ」

「……致し方ありません」

バル大佐は大きくうなずき、エレナに向きなおる。

「エレナ・シェーステッド少佐、貴官に当補給基地駐留艦隊司令を命ずる」

「は、はい！……はい？」

「詳しくは、ヒルガ少尉に聞きたまえ。では、二人ともさがっていいぞ」

バル大佐は二人を置いて再び大量の書類仕事に戻った。二人してバル大佐の執務室を退出する。シヨーンは、久しぶりに天を仰いで大きなため息をついた。

A - 5 ・非常に非情な人選（後書き）

拙いお話を読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1873z/>

宇宙孤児の秘密

2012年1月1日22時49分発行